

【無料】クリスタル憑きの少年 少女と獣の旅 第1章

戸野 自由（とのじゆう）

ユルリ県 1話

傾斜に沿って常葉樹が生い茂る、すり鉢のような形状をした深い谷の底に暖色の灯りがひしめいている。

寝ていると間違われがちで細い目で霧にゆらめく光を見つめ、国府長から渡された地図に目を落とし、目的地に間違いのないことを確認。

アイスは苦虫を嘔み潰したような顔でため息を吐き、^{こくふちょう}国府長との会話を思い起こす。

今から1ヶ月ほど前の正午。

刑監所に罪人として収監されていたアイスの元へ、世界で最も強い権力を有する国府、その中でも最高位の国府長が面会に訪れ、早口で用件を説明していた。

「初めまして。アイスクンですよ。これは人の^{ひと}クリスタルです。^{ふくふちょう}副府長を殺しかけた罪を消したいなら、このクリスタルを首にぶら下げたまま、地図で印をつけられている県を2年以内に全て回ってください。あ、その際は必ず県令と面会して、県の^{じゅうけんりつせいど}運営で困っていることを聞いてあげてくださいね。あ、それと、ボク的に心配だったんですが、アイスクンは自由県立制度をご存じですか？」

「……はい。アイスです。しかし驚きましたね。お兄さんはいきなり来て、初対面の人に質問から入るんですかー？」

「あ、ええ？ まさか、ボクの自己紹介が必要なのですか？ ボクをご存じない？」

人の印象は出会って数秒で決まるものだから、常に清潔な身なりでいて、言葉遣いも丁寧にしなさい。

嫌になるほど聞かされた教師の言葉だが、丁寧な言葉遣いが相手を無性に苛立たせる場合もあると、アイスは頬を引きつらせながら強く実感していた。

「250年前から始まった、3人以上の県民を揃えること、あとはゴルを通貨として使えば、国府の許可がなくても県を設立できる制度ですよー」

鼻が触れそうな距離にある、国府長の枯草色を湛えた瞳から明確な脅迫の意思を感じる。

苛立ったアイスは、指で机を小刻みに叩いていた。

「あ、ならボクの話が通じますね。このクリスタルは表面に映った人間の情報を蓄えます。それと、ある環境下に置けば、蓄えた情報を確かめられますので、アイスクンが指令をこなしたかどうか、後で把握できますからね？」

「……いや、というかー。県を回るとか、何のためにそんなことをするんですかー。どれくらいあるか、とかの把握すらできてないのが現状でしょー？」

「んん？ あ、ボクは自由県立制度を継続すべきどうか迷っているんですよ。なので、アイスクンが使命を果たすことは免罪符でもあり、世界を正しい形に直すきっかけになるかもしれない、重要なものなんですよ？ それに、指定した県の中には、大船団や学舎自体が県になっているものもあるんですよ、面白いでしょう？ もちろん受けますよね？ よねえ？」

自分と変わらない年齢に見えるうえに、どことなく似ているような気もするが、目の前の早口で話の長い男は仲良くなれるタイプじゃない。

むしろ大嫌いだ。

アイスはそう確信していたが、早く死んでしまえばばかりに腐りかけの食事を出す、劣悪な環境の刑鑑所から外に出るチャンスを出すわけにはいかなかった。

1ヶ月後、誰からの見送りもなく国府を旅立ったアイスが最初に目指す県、ユルリは深い谷底にある。

県の入口までの極端な急傾斜を道とするなら、転落防止のため、何かに掴まりながら下ることが必須。

だが、斜面に茂る常葉樹の幹や枝はどれもが細く、頼りない。

引き締まった筋肉を纏ってはいるが、全体的には細身で小柄な体格と言えるアイスの体重でさえも支えられないように見受けられる。

本来、目的地への正式なルートは県の西側から延々と伸びる緩やかな丘陵を下るものであり、命の危険を冒してこの急斜面を突破するものではない。

アイスはそれを承知のうえでなお、斜面を下るべく冷えた紺藍色の瞳で谷底を見下ろしている。

その理由は2つ。正式なルートに行くまでの距離を歩くのは猛烈に面倒くさいと思うから。

もう1つが、危険だと感じないこと。

「脚力+3、体幹+3」

本人の耳にしか届かない声量の、体格と不釣り合いな低く掠れた声が発せられる。刹那、琥珀色の光がアイスの体を覆って霧散していった。

よく整備された県道を歩くかのように、普段どおりの歩幅と速度を保ったまま、アイスは1歩めで転げ落ちて不思議ではない急斜面を、暗闇と同化する黒のモンク靴で下っていく。

谷底に近づくとつれ、薄く見えていた霧が濃くなっていった。

共に黒無地で袖なしの上衣と、脛から下をカットした下衣から伸びる手足にまわりつく霧を左右の手で拭きつつ、県を囲む鉄の壁に埋め込まれた鉄門の前に立ち、アイスは声を張り上げる。

「夜に悪いですねー、中に入りたいんですけどー？」

アイスは茫洋と待つが、しっとりとした濃霧がアイスの肌を湿らすばかりで、一向に中からの反応がない。繰り返してみたが、結果に変わりはない。

苛ついたアイスが口の端を歪め、嫌がらせの意味も込めた対応策を実行する。

「体幹解除、発声+4……」

ほんの一瞬、琥珀色の光が体で瞬いた。

アイスは左右に割れた胸筋を鉄門に向けて張り、喉仏を震わせて一気に声を吐き出す。

「あのおー！ 国府の遣いなんですがああー！ 中に入れてくれませんかああー！」

大きな筒に口を当てたかのような、大音量かつ、独特に間延びした掠れ声が鉄門をわずかに震わせた。

ほどなく、7人の男たちが鉄門のへりから顔を覗かせた。

泡を食った様子の男たちが握る携帯ライトの光が、アイスへ向けられ、ほうぼうに跳ねる癖のある紺藍色の髪を照らしている。

「こんな季節にそのような薄着で……少年、追い剥ぎにでも遭われたのか？ 答えてほしい」

アイスに応える40代くらいの男の口調は丁寧だが、反してその顔はひどく訝しげだ。

失礼な態度だけど、まあ無理もないか。

アイスは抗議を堪え、発声を解除してから冷静に応える。

「あー、僕は強化士きょうかしなんですよ。だから、服装と季節は……あーそのあたりはいいですね。僕はクリスタでもあります。クリスタについてはわかりますか？」

クリスタという言葉をきっかけにか、鉄門の向こうで大勢の人がざわめく気配が涌いた。

知っているかと問うた本人も、その名前を知ったのはほんの1ヶ月前。

アイスはつり上がった細い片眉を上げ、出会ってすぐに激しい嫌悪感を抱くようになった国府長の言葉を思い出していた。

「あ、クリスタルを携えた者は無条件で県に招き入れるように、手懐けた獣に手紙を運ばせて通達しておきました。もちろん、国府が把握できている県には、ですが。まあ、リストアップされているほとんどの県には話を通ると思いますね。あと、クリスタルを持つ者はクリスタと呼ぶことにしてありますので」

アイスの首にかかった鎖の先には、クリスタルと呼ばれる鉄紺色の水晶球が繋がられている。

鎖はクリスタルに埋め込まれているが、クリスタルの異常な硬度や耐久性を知るアイスにとって、鎖との結合方法は謎。

国府長に訊ねたときには答えをはぐらかされてしまっていた。

顔を見せていた男たちが3人に減り、比例して鉄門の向こうのざわめきが広がっていく。

アイスは薄い唇を真一文字に結び、両腰に手を当て、おとなしく待っている。

待つこと数分、アイスの背丈の5倍近い高さのある鉄門が、軋みと重低音を響かせながら内側に向けてゆっくりと開き始めた。

細い目をさらに細め、引き離された左右の門の間に見える暖色系の光の中へ足を踏み入れると同時に、アイスは琥珀色の光を視野の端に捉え、右を向いてぴたりと足を止める。

「やはり気づきましたか。こんなところから失礼いたします」

短く刈り揃えられた茶色の髪、痩せこけた顔に銀縁眼鏡をかけた細木のような男と、その後ろには10人ほどの男たち。

男たちの自由な服装を見たアイスは、軍兵というよりは自治団に近い感じかな、そのような印象を抱いていた。

ユルリ県 2話

「すみません、申し訳ありません。一応念のため、用心のために、その長い棒と腰に差した……それは剣？ ラージナイフ？ どうも中途半端な長さですね。ちょっと見せて頂けますか？」

申し訳なさげな声で詫びを入れる、銀縁眼鏡の男。一見して無防備なように見えるが、アイスは見逃していなかった。男が視界の隅で発した、強化付与の証である琥珀色の閃光を。

「あ一別に、争う気はないですよ。理由もないですしね。武器を預らせてほしいなら、どうぞどうぞー」

まずは背中のベルト鞘から棍を。次に肉厚で幅が広い、短めの刃を持つ ^{グラディウス} 剣 を腰のベルト鞘から外し、銀縁眼鏡の男の前に置く。アイスは軽い笑みを浮かべ、1歩退がった。

「ご理解、ありがとうございます。ちなみに、あなたが持つ武器は初めて見る種類なのですが……？」

武器について説明を促されていると気づいていたが、見返りなしで武装解除をしたうえに相手のペースで会話を続ける選択肢を、アイスは持ち合わせていない。

「自分の紹介なしで、さっきから要請とか質問ばかりですねー？ お兄さん、初対面の印象が最悪だね、とか言われたことないですか？」

驚いたのか、銀縁眼鏡の男は元から大きな目をさらに見開いた。右に立つ僧のような格好をした巨漢の目をすくい上げるように見て、顎をくいと上げる。

「いえいえ私めはそのような印象を持ったことはございませ……ん。ケロコンさま」

応えに窮して動揺したのか、不自然なところで躓いた巨漢を恨めしげな目で一瞥、銀縁眼鏡の男はアイスにも同じような目を向け、応えた。

「……んっ、失敬。私はこのユルリを統治する管理隊の副長です。名前はケロコン。性別は見てのとおり男で、素直で誰からも好かれやすい性格です。端正な顔だちをしているので、女性に苦勞はしていません。この眼鏡も似合うでしょう。あなたをここでお待ちさせたのは、私が熟睡していてなかなか起きなかったからです」

焦ったようにまくし立てるケロコンに、まるで汚物でも見るかのような冷たい瞳を投げ、アイスは思う。

(んー、馬鹿っぽいなー……真性の馬鹿。関わりたくない)

そのようにケロコンを拒絶しつつも、アイスは一応の礼儀として自分の名を名乗った。

「え？ なに？ ^{アイス}氷 がどうしました？ ^{アイス}肌寒いのに、^{アイス}氷 が欲しいのですか？」

(……このやりとり、もう飽きた)

名を告げる際、数えきれないほど経験してきた流れだった。辟易したアイスはケロコンの勘違いを正さず、自分がこの県を訪ねた理由と、県令への面会を要請。

どこか所在なさげに応えるケロコンによると、県の最高権力者たる県令は、広大な^{えんげん}塩原に雨が降ったときのみ見ることができる、天空の鏡と呼ばれる現象が有名なリュクスという県に出向いている。

リュクスは昔から塩に関する産業が盛んであり、様々な県から塩を求める商人が集まる県だが、ユルリの県民だけは県に入ることさえ許されていなかった。

それは2つの県の間で過去に起きた諍いに起因する問題だが、互いの権力者が世代交代していくうちにその対立感情が薄れ、今回、リュクス側からの接触に応じたユルリの県令が県交再開に向けての交渉に臨んでいるとのことだった。

「それでですが……あなたは どうされます？ 県令が帰ってくるまで待ちますか？ もしそうだとすると、滞在は明後日までで済みますね？」

「明後日ー？ あー、まあそうですねー。どこか適当な宿でも見繕って時間を潰そうかと。明日の夜、県庁舎に行けばいいんですよ？」

まず、ケロコンは首を縦に振った。続いてもういちど申し訳なさそうな顔で首を横に振り、この県には宿屋がないことを告げる。

驚いて眉根を潜めたアイスは、迎賓館やそれに相当する公的施設はありますよね、と訊ねるが、それもないという。

見る限りでは国府と大差のない裕福な県のはずで、旅人や客人をもてなす財政的な余裕がないようには思えない。

回答をどこか不自然だと訝しむアイスへ、ケロコンが問いかけた。

「失礼ですが、あなたは南門から現れましたね。私の見立てでは、何かの強化を付与して崖を下りてきたのではないかと。違いますでしょうか？」

獣がうろつく外を旅してきたことは知られているのだから、隠す意味もないか。

そう考えたアイスは、自分が強化士であると認め、かつ、強化士なら外でも寝れるでしょう、ケロコンが暗にそう言っていることも理解していた。

「もう行っていいですねー？ 武器はこのまま預けますが、ここを出るときは必ず返してくださいよ？ それ、国府から借りてるんですー」

言うと同時に、石畳の路地を街に向かって進み始めたアイスの右腕を、岩のような手が掴んだ。足を止めたアイスが顔を向けた先には、2メートル近い背丈はあろうか、筋骨逞しい巨漢が赤い火を灯したかのごとき目でアイスを睨みつけている。

「おおー。さっき嘘をついてた人ですね。どうしたんです？ 僕が県に滞在すると不都合でもー？」

嘲るように口の端を歪めたアイスは、わずかに開いた瞼の隙間に覗く^{こんあい}紺藍色の瞳に挑発の光を湛え、巨漢の赤い瞳を鋭く睨み返す。

巨漢のほうも引かず、自分より40センチ下にいる少年を親の敵のような目で見据えている。2人の無言の睨み合いは、不自然におどけた様子のケロコンが割って入るまで続いていた。

管理隊から離れて数分後。アイスはユルリの街を散策。

暮らしぶりは国府と大きく違うはずだよ、国府長からはそう聞かされていたが、アイスの目に大きな差は映っていない。

外壁に不死鳥などを象った装飾が施された住居や商店などの建造物が並び、若芽が息吹く街路樹を境に車道と歩道で分けられた道には、アイスが見慣れた服装の人々と形式の新しい電気車が行き交っている。

提供する商品の良さを謳った商店の看板には、ゴルを通貨とした取引価格が大きく記されていて、アイスはその安さに心の底から驚いていた。

ユルリで生まれ育てば、こんな旅をするはめにならなかったかも知れない。自分の家庭の経済力でも、どうにか普通の生活ができたかも。

まあ、こればかりは運みたいなものだし、と考えるアイスの顔、その口元が斜めに吊り上がっていたが、本人は自覚していない。

物見遊山のようにフラフラと歩くアイスとすれ違った人々の多くが足を止めて振り返っている。旅行者が珍しいのか、それともアイスの真夏の服装を信じられない思いで見ているのか。

ひそひそと何かを話す者たちもいるが、アイスは聴力を付与して内容を聞こうとはしなかった。

1時間ほど街を練り歩いたが、宿らしきものは見あたらなかった。だが、商店の数の多さからして、宿に近い形のサービスを提供する店はあるだろう。耐冷のおかげで寒くはないが、久しぶりにベッドで寝たい。

切実な希望を抱き続けてきたアイスだったが、やがて立ち止まり、力の抜けた顔で肩を深く落とし、長いため息に続けて呟く。

「.....野宿、決定一」

ユルリ県 3話

野宿を決意してから30分後、アイスは目の前に現れた4メートル近い高さの鉄壁を前に背面歩きをしていた。鼻腔に届く木々と土の匂いから、鉄壁の向こうには森か林のようなものがあると予想しながら。

鉄壁から10歩ほど距離を開けた位置で止まり、アイスは脚力を解除、脚力を+4に上げた。正面へ駆け出して踏み切り、鉄壁の向こう側に着地。

辺りを見渡したアイスの紺藍色の瞳に映る光景は、常葉樹の森。

何度となく気の抜けた欠伸を繰り返しながら、寝床の代わりになる太い幹を持つ木を探し、アイスは霧が籠もる森の中を歩き始めた。

(あー、でっかい穴が空いてるけど.....あれでいいか。眠くなってきたし)

やがてアイスはお目当ての幅よりも遙かに太い幹をもつ木を見つけ、気だるそうに近寄り、55キロの重さを木の幹に預けた。

だがすぐに強化土用の強靱加工を施されたバックパックの存在を思い出し、幹との間に挟まれたそれを足の横に移動、チャックを開けて何かを漁り始める。

国府から支給された、着ている服のスベア、濾過装置付きの金属筒に入れられた飲み水、換えの濾過フィルター、携帯用の薫製肉、豊富な種類の木の実。

マッチと携帯ライト、香水などの道具の脇に納められた愛用の小さな枕を後頭部で挟み、アイスは膝を抱えて目を閉じた。

街と腐葉土、それに水の匂いが混ざる、初春の冷えた夜風がアイスの色白な肌を撫でていく。雲が夜風に流れると、顔を見せた月が辺りを金色に染めてしまう。

うーん、眩しい。寝にくいな、迷惑そうな顔で月を睨むアイスの額に、生温かい液体が滴り落ちてきた。

「んー？」

頭を後ろに反らしたアイスを見下ろす蛍光色の瞳、耳元まで綺麗に開いた口元からだらしなく垂れる紫色の舌と腐臭を放つ液。一目で肉食とわかる鋭い牙は、口の奥から響く低い唸り声を受けてわずかに震えているように見えた。

幹の大きな穴から顔と両の前足を出した、人間の子供くらいの獲物なら容易く丸飲みできそうな巨狼。

「あこんばんはー」

呑気に挨拶をしたアイスの頭部と巨狼の牙の距離は、身を乗り出した巨狼の一噛みでゼロに。琥珀色の光に包まれた鋭利な牙がアイスの額と後頭部に触れたが、肉には食い込まない。

剛性+3の付与が間に合っていた。自分が噛んだものの硬さに驚いたのか、巨狼は頭を引いて口を閉じたが、機を逃さずに耐冷を解除、腕力+3を付与したアイスに上顎を掴まれ、地面に叩きつけられた。

足を震わせながら立ち上がる巨狼の狭い頬骨を、体重を乗せたアイスの拳が粉碎。血を吐いて昏倒した巨狼の

首を両腕で挟み、一気に捻って首の骨を折る。

鈍い手応えに勝利を確信、アイスは白目を剥いて動きを止めた巨狼を後目に、額に付着した巨狼の唾液をクリスタルで拭き取りながら幹の裏側へ歩いていく。

(あるかなー?)

何かを探して歩き、アイスは尖った石に目を留めて拾い上げた。踵を返し、木々の枝を折り取りながら巨狼の脇に戻り、抱えた枝を自分の後ろに置く。

腕力を解除、石に鋭利+3を付与。狼の首の付け根に石の先端を刺し、可能な限りの血を抜き終える。血の匂いに吐き気を感じながら、アイスはおぼつかない手つきで皮を剥ぎ始めた。

巨狼の解体を終えたアイスは、石に付着した血を脇に生えていた葉で拭き取り、鋭利を解除して摩擦+3を付与。背後に積まれた枝へ向き直り、石をクリスタルに打ちつけ、即座に枝の中に投げ入れる。

枝から白い煙が立ち上り始めた。

アイスは満足げな笑みを浮かべて頷き、火が上るまで待ってから巨狼の肉塊を右手で掴む。摩擦と脚力を解除、耐熱+5を付与。勢いを増した炎の中へ右手を入れ、異常に口を尖らせながら口笛を吹き、肉塊が焼けるのを心待ちにしている。

「さぶい……」

肌に触れる空気の冷たさに、アイスは耐冷を解除していたことを思い出す。だが、耐熱の解除さえ忘れなければ、味付けのない焼いた肉を食べるときに美味しく感じるかな。そう考え、アイスは久しぶりの寒さを味わうことにしていた。

あまり美味しくない食事を終え、耐冷+3を付与。アイスは巨狼が潜んでいた穴の存在に気を留めた。

あのファングウルフは夫婦で行動することが多い獣だ、まだ潜んでいるかも。念のために中を確認すべきかと少し迷ったが、襲われたとしても、ファングウルフなら+3以上の剛性を付与しておけば傷にはならないはず。

何より、面倒くさいし、と確認を止めた。

長い欠伸のあとに中潮の月を見上げ、アイスは指定された県を巡る自分の旅に思いを巡らせ、物憂げな表情で深く長いため息を吐く。

国府資料館にあった、数々の奇妙な県についての資料。

全県民が2つの巨大な宿で暮らす県、抽象的で意味がわからなかったが、県の総力を上げて指輪を育てている県。

2500メートルの高さをもつ、巨大という言葉では表現しきれない一枚岩の上に居を構えた県や、大船団を組んで世界の海を旅している県。

(……移動する県なんて、探しようもないしー)

間違いなく、苦労の連続だろう。ベッドで、できれば柔らかいベッドで眠る夜は幾つあるだろうか。考えれば不安や不満は際限なく湧いてくる。

(やめようー。眠れなくなる)

頭と幹の間に枕を挟み、アイスはもういちど長いため息を吐く。暫くの間、ぼうっとしていたが、やがて深い眠りへと落ちていった。

*

小さな雲が2つのみ浮かぶ、快晴と表現しても齟齬がないような青空。
柔らかな陽光に頬の裏を刺激されたアイスは穏やかな気持ちで目覚め、空を見上げながら屈伸運動を繰り返している。

(よし、水浴びー)

吹き抜ける風に水の匂いを嗅ぎとる。近くに川か沢があるに違いない。枕を押し込めたバックパックを背負い、風がやってくる方角へずんずんと進んでいく。

大人の足で4歩ほどの横幅がある川があった。アイスは近寄りながら服を脱いでいき、川に入るころにはバックパックを投げ捨て、全裸に。

まだ冷たいはずの水を両手で汲み取り、猫と例えられる顔に似つかわしくない、筋肉で引き締められた体に何度も浴びせかける。

水浴びを満喫し終え、散らばる服を拾い、アイスは布袋に入った石鹼をバックパックから取り出し、水に浸した服を洗い始めた。

必要以上に唇が尖った口笛を吹きながら洗濯を終え、剛性を解除。濡れた服と石鹼にそれぞれ速乾性と凝固性を+3で付与。白さと乾き具合に満足し、2つの強化を解除、アイスは突然、洗い顔になる。

(あー、首から上か.....)

面倒くさそうに頭を水に浸し、手指で髪の毛の汚れを流す。国府からの支給品に頭髪用の石鹼が入っていなかったことを思い出し、国府長に腹を立てながら。

仕上げの洗顔までを終えて、ひと仕事終えた、とため息を吐くアイスの耳に、人の声が飛び込んできた。

(んー?)

振り向いたアイスの目に、底の深い容器を手にした数人の男女が映る。何かを議論していた彼らのほうもアイスに気づき、その場で一斉に足を止めた。

「あー.....」

この川は生活に使われているのかと思い、かつ自分が全裸であることに非常の気まずさを感じたアイスは、顔を歪めながら唸り、頭をぼりぼりと搔く。

「きゃーっ！！」

栗毛の少女とその母親らしき中年女性が叫んだ。これはまずい。面倒くさいことになる、アイスは大慌てで服を着ようと立ち上がる。

「アンタ、川で体を洗ったの？ ちょっと……もう……勘弁してよ！」

中年女性が大股で近づき、大事な部分を隠しながら一生懸命に服を着るアイスの目の前で大股を開いて立ち、腰に手を当てて続ける。

「この川の水はねえ、生活用水なんだよ。アンタの汚い垢とか何とかをみんなで共有しろって？ え？」

迫り満点でずいずいと圧力をかける女性に、服を着終えたアイスは素直に事情を説明。自分が旅人であること、数日ぶりに水を見つけたので、何も考えずに使ってしまったことまでを伝え、そこから反撃に転じた。

「でも一、そもそも、自由に使えない川なら看板か何かでそう教えておくべきじゃないですー？ 僕のような旅人は知らないんですよー」

理は自分にあると確信を持つアイスの、横に薙いだ剣の軌道のような細い目から覗く紺藍色の瞳には、相手への挑発と批判の色が乗っていた。

「はい？ アンタさ、なに言ってんのよ？ ここに入るとき、事務所で管理隊に注意されたでしょ！」

(……あー)

なるほど。壁を越えなくても、どこかに事務所があったのか。確かに、それが当然か。中年女性の言葉から事態を察知し、アイスは渋い顔で頭を搔くが、それでも旅人である自分への説明が足りないのだと、素直に謝りはしなかった。いや、謝りたくなかった。

「壁を越えたので、事務所は通ってませんしー。第一、そういう決まりがあるなら県に入るときにしっかり伝えてもらわないとー……」

アイスの声には張りがなくなり、バツが悪そうに頭を搔きながら首を垂れている。中年女性は相手が怯んだと見るや、アイスがやろうとしていた理詰めを迫り、最終的に何も反論できなくなったアイスが頭を下げる形になった。

「最初から素直に謝りなさいよ。それよりアンタ、管理隊の許可なしでここにいるんでしょ？ ここは旅人が来るところじゃないし。今すぐ出て行ってよ」

アイスはトドメの一言にも反論する余地を見い出せず、薄い唇を真一文字に結びながらバックパックを背負う。周囲を取り囲む県民たちの目に得体の知れない敵意を感じながら、県民たちが来た道へ。

曲がり角にさしかかり、アイスはすりと脇の竹藪へ入った。太い竹の後ろに隠れて聴力+5を付与。川で水を汲んでいると思われる県民たちの声に耳を澄ます。

「——なあ、あの旅人だけどさ。強化士だろ。餓鬼なのに体が傷だらけだったしよ。危ないヤツなのかも。俺たちが管理隊に通報したほうがよくないか？」

「もちろん。どうして県に入れたのか知らないけどさあ。あんなのが街をうろついてちゃ、あたしたちの運気が下がっちゃう。当たりを引いちゃったら……さあ？」

「私も賛成だ。早く切り上げよう……おい、悪いが急いでくれるか！」

話の流れがよくない方向に向かっているな。アイスは迫り来る嫌な予感に眉根をひそめていた。

できるだけ早く街に戻ったほうがいいとは思いますが、旅人への対応の悪さの理由を少しでも耳にできないかと粘る。だが県民たちは核心をつくような言葉は何も言わないままで水汲みを終えてしまった。

各々が重い容器を抱え、ほんの数分しか関わっていないはずのアイスを悪く言いながら、本人が潜む竹藪を横ぎっていく。

(んー、管理隊への通報は確定したみたいだなー。めんどくさー。ならせめて、ヒント的な何かくらいは、ねー)

アイスは聴力を+4から+7にまで上げて県民たちの会話を拾い続けたが、聞こえなくなるまでの間にアイスが欲する情報は出てこなかった。

とはいえ、この県が旅人を避けているのは明らかで、自分は旅人。県を出るまでに面倒くさい問題を起こさないための労力とはいえ、無駄骨だったな、と苦々しく思う。

舌打ちをし、アイスは聴力を解除。街に戻ろうかとも考えたが、この場を上手く切り抜けたとしても、管理隊が街まで追ってこない保証はない。

なら、人目がないこの森で対応したほうが面倒な事態にならないだろう。そう考え直し、県民たちが通っていた道に出て、その場に座り込む。

ユルリ県 4話

15分ほどだろうか。何度も欠伸を繰り返しながら待ち続けたアイスの鼓膜が近づく音を捉える。何匹かの犬が荒い息を吐く音、土を踏みしめる靴の音。

わざわざ犬を。そんな必要はないのに、とアイスは鼻を鳴らしていた。

荒い呼吸が吠え声へと変わり、1人ぶんだった靴音が2人ぶんに増えた。アイスは気だるそうに立ち上がり、3匹の犬を先頭に接近する2人の男たちへ手を振り、自分から声をかける。

「あー、不審者は僕です。わかると思いますけど」

2人の男たちは吠えかかる犬たちを制し、事務所に帰るように命令。不満げに何度も振り返りながら帰る犬たちの後ろ姿を見届け、アイスと10メートルほど離れた道の上で足を止めた。

極端な身長差のある2人の腰には、それぞれ同じ長さの長剣が差されている。アイスの見立てでは、サーベルの一種だった。

「管理隊のムッケとピッコンだ。アイスどのと見受けられるけどね？」

あれ、結局は自分の名前だと理解されていたのか。アイスは意外に思いつつ、声をかけてきた背の高いほうを値踏みするような眼差しで見る。

なんか、竹みたいな体だな。と思いながら背の高いほうの質問を肯定し、同時に湧いてきた疑問を口にした。

「あの一。お兄さん方の名前ですけど、この県では普通なんですかー？」

何を頓狂なことを聞くのか、背の高い男はそう言いたげに首を縦に振った。背の低いほうも同意して頷く。

(うわー、文化の違いだー)

昨夜に出会ったケロコン、それにこの2人。どちらも国府で耳にする類の名前ではない。無作為に名前を知ることになった3人がそうであることから、アイスは文化の違いだと断定していた。

「そんなことより.....強化士てのはしょうがないね。あの高い壁を越えてきたんだね。それと、ここは県立自然保護園だけど、説明は受けていないんだね？」

ところで、自分に話しかけている男はムッケ、ピッコンのどっちなんだろうか。アイスは好奇心を抱き、質問のタイミングを見計らっている。

「.....すみません。説明不足で。壁を越えるケースは想定していませんでした。あなた方、強化士は常識の範疇を越えた力を持っています」

ようやく口を開いた背の低い男はどっちなんだろうか。アイスの好奇心は深まるばかりだった。やはり気に

なる、聞きたい。

アイスが口を開きかけたと同時に、2人は示し合わせたようなタイミングで道に腰を下ろし、言う。

「折り入って、お願いしたいことがあるんだ」

「嫌ですー」

「そうか、嫌か——えっ」

アイスは相手の驚きに驚いていた。自分の性格を知られている国府では誰かに頼られることはほとんどなく、稀に頼まれたとしてもじゅうぶんな見返りがなければ絶対に受けなかった。今回の旅も同様。

その考えは旅に出た今でも変わっていない。

「あー、何かを依頼するなら、まずは報酬を提示してほしいですねー。基本だと思いますが」

「おいおい、報酬って？ 国府の手紙には何でも頼んでいいと書いてあったんだが」

頼み事を受けるとは言われていない。アイスの脳裏に国府長の無感情なにやけ顔が浮かび上がる。

うさん臭い男だと思っていたが、1つめの県からその実力を発揮したな。

アイスは苦虫を奥歯ですり潰したような顔になり、事態が自分に不利にならないようにどう返すべきか、じっくりと考えを巡らす。

「あー、そうでしたね。すっかり忘れていました。お兄さんの言うとおりですー。ただ、無償で受けるとは書いてなかったですよー？」

無償で受けるとまで書かれていたのなら、今すぐ国府に帰ってあの男に抗議をしてやろうと思い、アイスはカマをかけていた。

少し考えるような素振りを見せ、背の低いほうが首を縦に振る。

正直な男で扱いやすいなと思いながら、依頼の受託には内容に応じたゴルが必要だと告げ、アイスは話し合いを始めた2人の返答を待つ。

最も望ましいのは依頼と取り締まりを諦めて立ち去ってくれること。

いや、簡単な内容で高額なゴルをもらうのも悪くないなと、アイスは頭の中で計算を始めていた。

「.....わかりました。では、先にお願したいことをお伝えします。必要なゴルはあとで教えてください。あの、なんというか。簡潔に言えば、ある女性を懲らしめてほしいのです」

「んー？ 女性、ですか？」

「はい。彼女はいつも弟と行動しています。姉のほうが強化士で、弟は普通の人間です。ここ数ヶ月、姉のほうが見境なく人を傷つけるようになってしまい、非常に困っています。弟は後ろから見ているだけなので、問題ではないのですが.....」

「えー、でも、お兄さんたちはそういう事態のために管理隊をしてるんじゃない？」

アイスに問われ、返答に困った様子の2人はしばらく押し黙っていたが、やがて背の低いほうが意を決したような顔で事情を説明し始めた。

この県には10ヶ月おきに催される大きなイベントがあり、全県民の参加が義務づけられている。そこではあるものを決めるための行事があり、良い結果を得られるかどうかは運次第。

その結果次第で人生が変わる。

県民は祭りの3ヶ月前にグループに振り分けられ、多くの者はジックスを遠ざけるために行動を起こす。運気を上げることを目的にしたそれらは、自分の経験からくるものや、古くからの言い伝えなどに基づいたものだ。

ユルリでは豊富な地下水を汲み上げて貯水池に溜め、各家庭に届けている。

自分たちにアイスの存在を知らせてきた一団が不必要な水汲みをしていた理由も良い結果を出すため。

恐らくは問題の兄妹が暴れまわる理由も紐付いているはず。

また、イベントまでの3ヶ月に起こった問題は、問題を起こした者と同じグループに所属する管理隊員が対処すべし、という決まりになっているが、強化士ではない自分たちの手には追えず、困りきっての依頼だと。

それと、自分たちがイベントの内容について話したことは絶対に誰にも言わないでほしい、とも。

アイスは腕を胸の前で組み、眉根に皺を寄せたままで押し黙っていたが、背の高いほうが気まずそうに咳払いをしたことをきっかけに、重々しく口を開いた。

「.....なるほどー。なんとなく合点がいきました。でも一つだけ。その行事では何を？」

「申し訳ありません。それは、言えません。県法で定められているのです。承知いただけないでしょうか」

背の低いほうの被せぎみの返答を受けたアイスは、ふん、と鼻を鳴らす。見下すような視線で報酬額は20万ゴルだと伝えた。

安い型の電気車1台ぶん相当する額を告げられた2人は身を硬くし、どうか、どうかと減額を願い出る。

「19万9900ゴルにしましょうかー？」

朗らかな口調とは真逆の投げたような笑みを浮かべる、アイス。2人は言葉を失っていたが、さあどうしますかと急かされ、震える声で承諾。

姉のほうを県庁にある管理隊の本部に連行。2、3日の間、本部の独房で反省してもらおう。自分たちが彼女に手を出すことは絶対にない。

アイスは、性的なことが目的ではない旨、依頼の達成要件、姉弟が出没するエリアへの道順を確認、約束は守るようにと念を押す。破れば無事に済まないと。

頷いた2人に満足、アイスは軽い挨拶をし、脚力+5を付与。数秒で2人の視界から姿を消した。

侵入したときと同じように鉄壁を跳び越え、アイスは街に降り立った。人気のない場所だと思っていたが、この時間になると多くの県民が行き交っている。

県民たちは空から現れたアイスに仰天。運んでいた果物を落とし、大きな悲鳴をあげて逃げる女性の姿もあった。

「あー、すみませんね」

心のこもらない声で謝り、アイスは街の中央にそびえる時計塔を目指す。

目標の姉弟は、時計塔があるケムシ地区に居を構えていて、この時間帯なら時計塔から伸びる影の先端付近に自宅があるとのこと。

時計塔までの最短距離を抜けるつもりだったが、そのルートには大きな目抜き通りがあると知ったアイスは、県民との接触を避けるために細い脇道に入り、その速度に驚く県民の間をすり抜けていく。

途中、何度か商店の軒先に並ぶ商品を弾き飛ばしていったが、アイスはまったく意に介さない。

勾配の急な坂から伸びる下り坂を一気に駆け下り、煉瓦で積み上げられた時計塔前の広場を抜け、一直線に伸びた影を辿って進んだ先に、終わりがあった。

アイスは小さな民家の前で足を止め、脚力を解除、発生+3を付与。強化によって拡声された、割れるような声を出す。

「あー、名前聞いてなかったー」

基本的なミスに気づいたアイスが頭を掻く間に、一様に目を見開いた県民たちが民家の窓から顔を出していた。食器を洗っていたのだろうか、フライパンを持ちながらバルコニーに立つ大柄な女性の姿もある。

「あの一、みなさんを相手に暴れている姉弟がいると聞いてきました。それで、すみませんが一、その姉弟の家を教えてくださいませんか？」

「――うるっせえんだよっ！ どの誰だテメエっ！」

アイスの首が重低音のような声の方向へ向くと、視界がフライパンになった。

弾かれたように横に跳んだアイスの左側、民家のガラスが木っ端微塵になって飛び散る。

嘎れた悲鳴が飛び出した窓を一瞥、アイスは正面を向き、バルコニーから跳び降りようとしている、エプロンを纏った岩石のような女性の姿を認めた。

「あー、みなさん。もういいです。お騒がせしましたー。家に引っ込んでてくださいー」

鼻を鳴らし、耐冷と発声を解除、剛性と強靱性を+2、反応と聴力を+3で付与。自分と同じように何度かの琥珀色の光を放ちながら、大股で接近する女性に声をかける。

「あなたが暴れている人ですねー？」

その声が震えている。常に目が細いので相手には気づかれにくいだが、これまでに見てきた女性たちとかけ離れた風貌を前にし、アイスは笑いを堪えていた。

鍛錬の結果だろうか、女性は横に隆起した胸を張り、両腕を組む。

「だったらなんだってんだよ、オウ？」

褐色の肌、頬骨の張った顔、赤い瞳。左は首元まで、右は膝までと極端に長さの違う紫色の三つ編み、190センチ近くありそうな巨軀に纏う、はち切れそうなピンク色のエプロンと、光沢があり上質な印象を受ける白いワンピース。

花をあしらった巨大な靴。そして、深い穴から吹き上がる風のような声。

ターゲットかどうか、確認するまでもないな。そう判断し、アイスは女性の顔を見上げながら応える。

「いやー、なんて言うか。あなたを管理隊の本部に連れて行こうと思うのですがー。おとなしくついてきますー？」

「ああん、管理隊い？ バカかテメエ！ 行くわけねえだろ。あんな辛気くさいところに行ったら……ジंकウスがついてきちまうだろうが！」

「そうですねー。だから、あなたを叩きのめしてから連れていきますね。あー、忘れてました。僕はアイスという名前ですー」

にこりと微笑んでからバックパックを投げ捨てたアイスの顔に、風を唸らす打ち下ろしの拳が迫る。その拳を左の肘で弾いたアイスが女性の深い懐に潜り込もうとするが、突き上げられた膝で阻まれた。後ろへ大きく跳んだ先で腹部を押さえ、アイスは痛みに顔を歪める。

(うーん、3か4かなー)

衝撃防御用の強靱性+2を付与しているにも関わらず、単純な蹴りでダメージを受けた。この状況から、アイスは相手が脚力を+3以上で付与していると推測。

女性が非武装であることをふまえ、断裂防御用の剛性を解除、いったん強靱性を解除してから、強靱性を+3に上げた。

「——おうら！」

岩の塊のような肉体が、重さの尖兵たる肩を前にアイスへ向かうが、決して避けられない速度ではなかった。

突進力を終わらせる相手を失い、大きくよろめいた女性の膝裏へ靴裏を合わせ、膝を落としたそのこめかみに足の甲を叩きつける。

「あん？」

女性には効いていなかった。蹴り足を掴もうとした女性の手をかわし、アイスは両脇の民家の間へ。

(脚力+3、強靱性+1くらいかなー)

肩タックルは反応+3でどうにか避けられる速さ。こめかみに蹴りを入れても効果はなかったが、裏を蹴られたときには膝を落としていた。

この状況から、アイスは女性をパワーで押すタイプだと判断、対応方法を決定。

空気を裂きながら迫る巨体の跳び蹴りを屈んで回避、聴力と腕力を+4で入れ替える。スイングされた丸太のような腕を避けずに顔で受け、足払いを跳んで避け、首を掴もうとする手を払って懐に潜り込み——腰の回転を乗せた、抉るような右拳を肋骨に叩き込み、一弾指に左拳を鳩尾へめり込ませた。

「ぴっ」

短い悲鳴のあと、女性の巨躯が背筋を伸ばす。瞳が瞼の裏側へ回り、口から胃液のようなものを垂らしたまま、膝をついて前方に倒れる。

アイスは手についた女性の分泌液を汚く思い、生成主のワンピースで一心不乱に拭っていた。ふと、背後から迫る靴音に気づき、女性の体に手をついた勢いで体を横に跳ばす。が、背中に熱を感じた。

数滴の血を振り飛ばしながら体の向きを反転させたアイスの喉元へ刀身が接近。アイスは頭を後ろに反らして避けたが、突き出された切っ先がその動きを追う。

どうにか裏拳で剣を弾き飛ばしたところで、襲撃手の姿を確認できた。

少年はまだ10歳くらいだろうか、気を失っている女性と同じく紫の髪と赤い瞳、褐色の肌。痩せこけた頬を余計に際立たせる大きな目の下に目立つ、極端に血色の悪い隈、小さな口。

頬と同じく体も痩せていて、やけに白さが輝く、上質そうな上下の肌着に光沢のあるリネンのオーバーオールを合わせ、足下にはアイスと同じ黒のモンク靴。

低い背丈に不釣り合いなバスタードソードを自分に向けている少年は、まず間違いなく倒れている女性の弟だろう。しかも情報に反して強化士じゃないかと、斬られた背中の傷が浅いことを確認しつつ、アイスは苦い顔になる。

少年は痩せて痛々しいほどに大きく見える目でアイスを鋭く睨みつけていた。

威嚇なのか、バスタードソードを小刻みに揺らし、切っ先をアイスの顔の前で止め、動かさずに体を横に移動、労わるように女性の肩へ手を置いた。

「あんだ、どしてマルーイを襲う？」

これが訛^{なま}りというものか。そして、またしても奇抜な名前に呆れ返りながら、アイスは少年を分析していた。

細身で気の弱い少年に見えなくもないが、眼光の鋭さ、悪くない剣技の冴え。姉のマルーイよりは戦闘経験を積んだ強化士だろう、と。

「こたえろ。妹を傷つけだのはなんでだ！」

アイスは計算を始めた。この少年をどうすべきか。依頼の対象はマルーイだけ。弟が強化士だとわかったのだから、弟も連れていけば報酬を2倍にできるかも。

よし、そうしよう。妹と一緒に。妹……

「……妹って言いましたー？」

「そうだ。妹だ！ あんだ、旅のひどだろ。どして妹を狙うべさ！」

妹、その言葉の意味をもういちど考えてみたアイスだったが、相手と自分が共通の言語を使っている以上、あくまで妹は妹でしかない。

そう理解したうえで、アイスはもういちど聞かずにはいられなかった。

「妹、ですかー？」

無表情だった少年の顔に憤怒がはしる。素早く踏み込んで殺傷範囲にアイスを収め、瞬く合間にバスタードソードを水平へ薙いだが、間合いを見切って上半身を反らしたアイスには届かず、宙に浮いたクリスタルと接触、互いを弾き合う。

伝わる衝撃、アイスは少年が繰り出す斬撃の重さに少し驚いていた。へえ、やるもんだなーと。

それにしても、兄妹が逆にしか見えない。いや、実は妹のほうが外見より遙かに若い可能性も。女性は声変わりしないし。いやそれは関係ないな。

アイスは少年の攻撃を警戒しながら考えるが、次第にそのあたりのことはどうでもよくなってきていた。

「あーもうめんどくさい。というかー、よく考えたら依頼にない対象を連れていっても報酬は払えない。とか言われたら反論できないしねー」

あれ、また声に出してたか。アイスは稀に出してしまう自分の癖を苦々しく思ったが、面倒くさく思えてきていることは紛れもない事実。

「依頼されているんですー。詳しくは知りませんが、お兄さんたちは運気を下げたくないんでしょー。それと関連してるんじゃないですか？」

イベントの件は話すなど言われたが、依頼の話は伏せろとは言われていないので、伝えても問題ない。面倒なことにならないように、と願い、アイスは提案を持ちかけた。

「お姉……妹さんやあなたに恨みはないですー。あとは妹さんを管理隊の本部に連れていくだけですー。危害は加えない、何日か本部で預かるだけと言っていましたよー？ たぶん、イベントの邪魔をされたくないじゃー？」

各々の家の窓から県民たちが外を窺い始めていた。報酬にもなりそうにない以上、アイスとしては一刻も早くマルーイを連れてこの場を立ち去りたい。

「……妹は美人だべ」

マルーイを慈愛に満ちた瞳で見やる少年の眩きを拾い、アイスは自分の耳を疑いたくなかったが、それが空耳や聞き間違いの類ではないとわかっていた。

このあとに続く少年の言葉を予想して辟易し、どうすれば少年が矛を収めるか、考えを巡らせる。

「もしも本部で妹が襲われたら、あんだ、どうしてくれるんだべ！ 本部にずっといるわけでねーだろ！」

生来の目の細さから相手には気づかれにくい軽蔑の眼差しを向け、アイスは倒れているマルーイに少しずつ近づく。

少年に聞こえるよう、敢えて声を潜めずに付与編成を読み上げた。

「強靱性、反応、解除。腕力+8、強靱性+2！」

バスタードソードを大上段に構え、アイスとの間を詰めていた少年の足が止まり、元から大きな目が頬骨を押しつけるかのように見開かれた。

アイスが、振り上げた右拳を雷のような勢いで足下の石畳に振り下ろす。鼓膜にまで伝わる震動、破碎音。

アイスを中心に放射状の亀裂がはしり、石畳が崩落の悲鳴を奏でていく。

3人は地面に開いたすり鉢状の大穴、5メートルほどの深さの底へ引きずり込まれるように落下。背中に激しい衝撃を受けた少年はバスタードソードを支えに立ち上がろうとするが、力が入らないのか、上手く立ち上がれない。

一方のアイスは怪我もなく穴の底に着地。その両手にはマルーイが抱えられていた。律儀に降り注ぐ金色

の月光に包まれたアイスの顔には満面の笑みが浮かび、小さな口からは嬉しそうな言葉が飛び出した。

「修繕費の請求先は、国府のいちばん偉い人でー」

少年の元へと歩きながら、アイスは腕力を解除。脚力と腕力を+4で付与、妹を放せと叫ぶ少年の脇にマルーイを無造作に置き、すぐに背中で背負い直す。

「えっ」

驚いた少年を両手で抱き上げ、アイスは穴の傾斜を難なく登っていく。傾斜の際で少年を穴から放り出し、自由になった腕で体を押し上げ、穴から脱出。

マルーイを足下に下ろし、どれくらいの穴が開いたのかと振り返る。

半径4メートルほどの穴だった。巻き込まれてしまい、土台が3分の1ほど崩落、大きく傾いた民家もある。

やり過ぎた、いくらなんでもこれはまずい。と顔をひきつらせたアイスは、脚力の代わりに発声+4を付与、大きく息を吸って言う。

「……あー。みなさん。ご迷惑をおかけしましたー。諸々の修繕費は国府長宛てに請求してくださいー。いいですかー、国府長ですよー」

言い終えたアイスは、周囲にあった人の気配が激減したことに気づく。逃げたな、あとで依頼主にもしっかりアピールしておかないと。

そう考えながら発声を解除、獣以外との戦闘ではまず役に立たない耐冷を付与するかどうかの判断を下すべく、マルーイの元へ這い寄っていた少年を見る。

マルーイに覆い被さり、アイスを見上げる少年の瞳には気力が見られない。

強化士としての力量差を見せつけるで正解だったか、と満足し、アイスは耐冷を+3で付与。少年とマルーイを見比べ、妹の巨体を庇うには面積が足りなすぎる、と笑いを噛み殺していた。

「……あんだ、1段……？」

まだ笑いを堪えつつも、アイスは少年の問いに対しては冷静に頷いてみせる。

応えを受けた少年は魂が抜けたような目でアイスを見つめ、握り続けていたバスタードソードを鞘に納め、降伏の意思を示した。

「すみませんでした。でも、どうかおねげえします。管理隊は信用できねえ。どうか、連れていがねえでくろろ……」

アイスはひれ伏した少年を無表情で見下ろしていた。その姿を見上げ、少年は言葉を失ったように黙っていたが、やがて振り絞った声でもういちど懇願する。

「どうか、どうかおねげえします……」

アイスは澄ました顔になり、口を尖らせていた。頭をぼりぼりと掻きながら腕を胸の前で組み、わざとらしく眉毛の上に手の側面をあて、マルーイが立っていたベランダがある家に向けて首を伸ばし、言う。

「ところで、お兄さんの家、大きいですねー？」

「え……」

アイスは口元を機嫌のよい猫のように波うたせ、面をくらったような顔の少年に爽やかな笑みを向ける。

「富豪、裕福ー？ まあどっちでもいいんですが。そんな感じですよー？」

目が丸くなり、困惑したような顔で頷く少年。アイスは満足げに鼻を鳴らし、たった今、何かを思いついたように両手を叩いて言った。

「こうしましょうかー？」

アイスは取引をもちかけた。マルーイを見逃して欲しいなら、2つ条件がある。

1つめは報酬として受け取るはずだった20万ゴルを払うこと。2つめはユルリで10ヶ月おきに行われているイベントの詳細を教えること。

条件を提示された少年に迷いは見られなかった。イベントは明後日に催されますが、内容はどうしても教えられないので、そのぶんを上乗せして25万ゴルを支払います、と言う。

「明後日……なるほどー。それでかー。あーちなみに、2つめを話せない理由はー？」

アイスの問いに、少年はこう応えた。万が一、旅人に話したことが明るみに出た場合、間違いなくユルリを追い出されてしまう。

自分たちには身体的な重度障害をもつ母親がいるから、他の県に受け入れてもらえる保証がないのだと。

アイスは森での管理隊員たちとの会話を思い出し、考える。あの2人も同じ旨を言っていた。イベントの内容を話すことは県法で禁じられていると。

ユルリが旅人を拒む体制になっているのも、イベントの秘密を守るため、か。

それにしても、ここまで簡単に金額を吊り上げる財力があるなら、もう少しふっかけておけば良かった。アイスは内心で強く悔やみながら、色を取り戻しつつある少年に言った。

「なるほどー。よくわかりました。なら、25万で手を打ちますねー」

巨大な妹を持つ少年の名は、ホソーイ。居間に入る際に告げられたその名前に、アイスはフ、フッフ和不気味な笑いを漏らしていた。

背中に負った浅い傷の治療のために耐冷と自然治癒+3を入れ替え、アイスは横抱きしていたマルーイを床に下ろす。

自分の家なら丸ごと入ってしまいそうな広さの居間を眺めたアイスは、^{けんらんごうか}絢爛豪華。その言葉を思い出していた。

世界に生息する獣たちを象る装飾を施された家具と調度品の数々。長毛種の猫の毛に近い感触を覚える絨毯。火が燃ゆる黒曜石の暖炉。極めつけは居間の中央に設置された、獅子の形をした噴水。

靴を脱いで家に入る時点で既に自分が育ってきた世界との違いを感じていたアイスだが、この噴水の無駄っぷりには憤慨に近い感情さえ覚えていた。

「ど、どうかしだべか？」

噴水を険しい顔で凝視するアイスに不安を感じたのか、意識を取り戻して痛みに呻くマルーイの脇から、ホソーイが怯えた声を出す。

「あー、いえ。気にしないでください。それより、まずは2人の治療からいきましょうか？」

アイスは、10メートル以上の長さはあるのか、黒曜石で造られたバタフライテーブルの脇、真綿のような手ざわりのクッションを乗せた椅子に腰を下ろした。

右甲板に置かれた、絹に近い手触りのメモ用紙と不自然な重厚感があるペンを手にとり、アイスは文字のようなものを書きあげる。

「これが、自然治癒の^{げんじ}原字ですー」

「ヴー！」

痛みにも慣れてきたのか、手負いの獣のように犬歯を剥き出しにして威嚇するマルーイの姿を見たアイスは、ちょっとやり過ぎたかなーと頭を掻きながらホソーイに紙を手渡す。

荒れる妹をなだめ、ホソーイは言い聞かせるように言った。

「マルーイ。アイスさんはもう敵じゃねえ。そら、原字だべ。ほれ、おめえも持ってねえ、自然治癒だっ
だよ」

悔しげな顔はそのままに、兄から差し出された紙を受け取り、マルーイは紙に書かれている文字のようなものを人差し指で宙になぞり、兄も続く。

兄妹の体から琥珀色の閃光が煌めき、強い風に吹かれた霧のごとく静かに消えていった。

「習得、完了ですー」

椅子から2人を眺めていたアイスが白々しい拍手をした。熱した鉄を飲まされたかのような表情を浮かべるマルーイだったが、兄に自然治癒の付与を促されると渋々に従う。

2人の体を琥珀色の光が舐めたことを確認、アイスはテンポよく依頼をこなそうと積極的に話を振った。

「じゃあ、強化についての講義をしますー。メモが必要かもですー。まず、お兄さんたちは誰かの元で強化の訓練を受けたわけじゃないですねー？」

ホソーイは頷き、痛みに顔を歪めながらバタフライテーブルの脇の椅子に腰を下ろした。アイスが卓上を勢いよく滑らせたメモ用紙とペンを受け取り、お願いするべと言って頭を下げる。

「強化が何なのか。それは知ってますかー？」

やや困惑したような表情になり、ホソーイは首を横に振った。その反応を見たアイスはゆっくりと頷き、やや芝居がかった口調で続ける。

「それが正解ですー。僕も含めて、誰も知りませんー。強化がいつからあるのか、3人に1人くらいの確率で強化を使える人とそうでない人がいる理由とかー」

3人に1人、ホソーイは早速メモを取り始める。その間、アイスはマルーイから発せられる眼光鋭い視線への無視を決め込んでいた。

「なので、今から話す内容も間違っている可能性がありますー。その前提で聞いてくださいねー」

アイスはまず、強化の習得についての説明を選んだ。強化を習得する方法は2つある。1つめは、強化ごとに決まった原字を知り、先ほどの2人のように自分の指でその原字を描くこと。

2つめは、原字を思いつくこと。どのようなタイミングで、どうして思いつくのか。これは誰にもわからないことだが、実際に固有の強化を使いこなす強化士が存在し、アイス自身もそれに当たる。

自由県立制度が広まる前に行われた調査によれば、違う人間が同じ強化を思いつくことはないらしいが、原字を知れば他人でも習得は可能。

「メモ、大丈夫ですかー？」

固有の強化がある。強く驚いた様子で動きを止めていたホソーイへ、アイスはメモを促す。

次は、強化の付与値について。付与値は+で表現されるものであり、数値が大きいほうがより高い強化効果を得ることができる。

付与値には上限があり、これを上限値と呼ぶ。

上限値には個体差がある。自分を例にあげれば、全ての強化の付与値を足して+10までが上限値。だがその一方で、1つの強化に紐づく上限値は存在しない。

自分なら腕力を+10で付与することも可能だが、当然、その場合には他の強化を付与できなくなる。

「アイスさんの、やっぱり+10だか。戦ってるどき、それくらいの付与値になってたし……1段の強化士なんで、初めて見たべ」

「まー、そうかも知れないですねー。公式に認められている1段は数人しかいないみたいですしー。ちなみに、0段についてはー？」

心あたりがないのか、ホソーイは眉をひそめて首を横に振った。

アイスは同じ質問の意味を込めてマルーイを見たが、舌打ちをされ、苦笑いをしながら目を逸らす。

(無理もないかー。0段認定を受けている強化士はあのオジサンだけみたいだし)

今から約1ヶ月前。国府庁舎の最上階から1つ下の階。外との境界線たる外壁をガラスで埋め尽くした部屋、その中央。

アイスは、不透明なガラスに囲まれた四角い空間の前に胡座をかいて座る筋骨隆々の肉体、髭が生えた精悍な顔の40歳前後と思しき男の姿を思い出していた。

0段の強化士。その存在自体を知らなかったアイスだが、戦いたくない。直感的に感じた男を前に、国府長による男についての説明を疑う気にはなれなかった。

「ですよー。僕が言いたかったことは、1段だからといって僕より強い人がいないわけじゃないってことですー。少なくとも、1人は実在していますからー。じゃあ、次いきますよー」

次の説明は、付与上限値を上げる方法について。実は単純で、強化を付与した状態での戦闘経験を積み上げていくこと。

但し、同じ量と質の経験を積んだとしても、成長の速度は人によって全く違う。

ユルリ県 7話

「僕はホソーイさんより年下だと思いますが一、たぶん数倍以上の経験を積んでいます一。ま一、特殊な家庭環境の賜物ですかね一」

恐らくは自分の強さについての質問がくるだろう。そう考えたアイスは機先を制した。このあたりの話を掘り下げる必要はないはずだから、と。

「じゃー、次は強化の付与と解除、聴力の重要性について、いきますね一」

付与と解除は強化名を読み上げることで成される。幾つもある強化をどのように組み合わせるか、これを付与編成と呼ぶが、声に出せば相手に自分の編成を知るチャンスを与えてしまう。

強化の性質上、これは避けられないリスクではあるが、自分にもその機会があるということにもなる。多くの強化士は相手の編成を把握すべく、聴力を付与した状態で戦いに望む。

「ちなみに一、強化士が腕相撲をした場合。腕力+4だけを付与した人は腕力+5だけの人には必ず負けます一。強化と強化のぶつかり合いでは、本人の筋力は影響しませんので一。これは理解してますよね一？」

ホソーイは深く頷く。アイスはそれを前提で、と前置きをしたうえで、本題の1つである、付帯効果について説明に入る。

例えば、脚力のみを付与した状態で肩タックルをした場合。脚力が強化されて速度は上がるが、肝心の肩にかかる強化付与が成されていないければ、加速が乗ったぶん、自分の肩に大怪我を負う危険性もある。

「要は、自分は怪我をせずに肩タックルで相手を打ちのめしたいのなら、脚力と腕力^{ふたいこうか}を付与する必要があるんです一。腕力は指先から肩の付け根くらいまでの筋肉を強化しますので。これを付帯効果と呼びます一」

アイスは薄い笑みを浮かべてマルーイのほうを向いていた。マルーイはその意味に気づいたのか、顔を真っ赤にして齒軋りをし始める。

「あ、あの。アイスさん、妹のこどもは構わないでくんねえですか。余計に興奮しちゃうので……」

「あーすみません。ま一このあたりは難しいですし、まだ正確なことを把握できたわけじゃありませんけど一」

そう前置きしたうえで、アイスは付帯効果についての補足をする。

腕力の付帯効果を例に挙げるなら、効果が発揮されるケースは腕力を必要とする行動を自発的に起こしたときのみ。

例えば、落ちてきた岩に気づかず腕に直撃を受けた場合、腕力を駆使して止めるという行動がないため、腕へのダメージは避けられない。

だが、剛性や強靱性などの防御に使う強化はその限りではなく、強化士本人が感知できなかった攻撃にも防御効果を発揮する。

また、これらの強化を付与している場合、付帯効果は打ち消される。

「それと、重複効果についても説明しておきます一」

例えば脚力と俊敏性のように、同じ部位にかかる強化を付与した場合も、各々の付与値を合計した効果を得ることができる。これを重複効果と呼ぶが、条件に当てはまる強化の組み合わせはそれほど多くない。

「ちなみに、強化士の段位制度については知ってるんですよねー？」

「うんだ。3から1段まであって……ぜ、0段？」

アイスは首を縦に振り、補足をする。

段位は上限値の高さによって分けられ、+1から+4、+5から8までがそれぞれ3段と2段。+9から12までが1段で、公式上は最高段位とされている。

段位を正式に取得する場合は国府庁で認定を受ける必要があり、自由県立制度が制定される前は認定なしに段位を騙ることは禁止されていた。

だが今では段位を分ける基準だけが残り、多くの強化士が認定なしに段位を纏っている。

「……昔は、だめだったんですが」

「そうみたいですわねー。ちなみに僕は公式認定を受けてますー」

そう言い、急に投げたように笑うアイスの顔を、ホソーイは上目遣いで不思議そうに覗き込んでいるが、アイスは何かを考え、気づかない様子だった。

「……じゃあ、次いきましょうかー」

アイスが次に触れたのは、強化を付与する対象について。

強化には対象によって付与できないものもあり、腕力と剣、俊敏性と靴などが挙げられる。

また、剣などの物質については所有権に関係なく他人のものでも付与できるが、腕力など生物を対象とする強化は本人にのみ付与することができる。

「さー、次で最後ですー。そろそろ手が疲れてきましたかー？」

と言いつつ、アイスはホソーイの反応を待たずに最後の説明へ入った。

「強化を覚えるとき、原字が必要ですねー？ その原字ですが、不思議だと思ったことはないですかー？」

「不思議、だべか……？」

「曖昧な表現ですが、たぶん、表現としては間違っていないかとー。あの原字、意味のないものでしょうかー」

考えたこともなかった、というような顔で、ホソーイが自然治癒の原字を卓上になぞるが、習得時のような琥珀色の光は発現しない。

「昔、国府が強化の原字を集めて研究しましたが、結果、何の意味も見い出せず、ただの形だ、という結論になりましたー。それは今でも変わってませんー」

でも、と小さく呟き、アイスは両腕で伸びをした。終えて欠伸をし、ホソーイに語りかける。

「獣にも言葉を話せる種族がいるのに、強化は使えませんー。僕たち人間だけの力です。僕は自分が使っている力の正体がわからないことが嫌なんですー。それで」

と言葉を切り、アイスは遠くにある窓を見た。

いつの間にか依頼の範疇を越えた話をしている自分に気づき、何をやっているのか、と頭をぼりぼりと掻いてから鼻を鳴らす。

「……まー、とにかくー。原字は強化に繋がる唯一の要素ですから。習得したものに関しては、全て暗記することになっていますー」

ふー、と長い溜め息を吐き、ここまでが僕の講義だと告げたアイスへ、ホソーイがおずおずと手を上げ、へり下った口調で言った。

「おいらたちに強化を教えてくれてたひどがいて。そのひどが死ぬまえ、共聴を習得させてくれたんだども……付与しても何も起きねえし。共聴って……」

アイスは左の眉を吊り上げていた。質問をしたことで怒らせたと思ったのか、頭を下げて謝るホソーイに向かってアイスは首を横に振った。

「共聴はですねー、死んだ強化士から強化を奪うためのものですー。もちろん、平和的に譲る用途にも使えますけどー」

言葉を失ったのか、ホソーイはアイスを見たまま目をしばたかせていた。アイスは少し気まずいなと思いながらも、言葉を続ける。

「たぶんその人はー、2人に自分の強化を譲りたかったんじゃないかとー。でも、説明する力は残っていなかったー。扱いが難しい強化ですのー」

「えっ……？」

口に手をあてて驚いたマルーイの姿に、初めて女性らしい仕草を見せたな。

アイスはそう思い、少し意外に思う。ホソーイを見ると、その細長い顔が冬の雲のように曇っていた。

「……3分ですー。強化士が死んでから3分。この間に共聴を自分へ付与して、遺体の頭部に触れますー。1つの強化を習得するのに3分くらいの時間が必要なので、実質は1つしか得られませんー。それと」

どうにか女性のものだと判別できるすすり泣きと、拳を握り唇を震わせるホソーイを目の当たりし、アイスは次の言葉を選ぶために言葉を断った。

すすり泣く声と重苦しい沈黙が流れる。

どんな言葉を入れるべきかと迷うアイスは頭をぼりぼりと掻き、眉間に皺を寄せていたが、やがて意を決した

ように口を開く。

「.....僕は死人に共聴を使った経験がありますー。なので、説明もできます。触れてから2分半くらいで、相手が習得した強化の名前と原字が頭に流れ込んできます。残り30秒で選んで、あとは普段どおりの習得手順ですー。ただ、共聴には注意点があるんですー」

ホソーイが素早く顔を上げ、口を開きかけたが、アイスは構わずに共聴の注意点について語り続ける。まるで、ホソーイの動きに蓋をするかのように。

共聴を付与して遺体に触れる際は、4分以上、連続して遺体に接触しないこと。越えてしまった場合、接触する相手の記憶と人格が自分に流れ込み、精神崩壊を起こす危険性が高く、実例もあるらしい。

ユルリ県 8話

「.....他に質問はありますかー？」

ないだろうなとは思いつつも、一応の礼儀としてアイスは確認したが、結果は予想どおりだった。2人は何も言わず、それぞれの思いに浸っているよう。

「では、講義を終えますー。それで.....ほう」

早速、報酬が欲しい。そう言いかけたものの、とてもそんな雰囲気じゃないな、とアイスは言い淀む。

どのような言葉をかければ自分が望む方向へ話をもっていけるのか、と頭をひねるが、他人に気を遣うことが大の苦手だと公言してきた自分を思い出し、穴だらけのぼろ切れで言葉を覆わずに、いつもの調子で要求をしようと決意。

「報酬」

そう言いかけたところで、ホソーイが手を上げてアイスを制した。痩せこけた頬を涙と鼻水で濡らして。

「あんがとござび.....ますた。ゴルを管理しでるひどが夜にならないとこねえんで、待ってくんろ」

ゴルを管理している人。親かと思い、アイスは質問してみたが、返ってきた答えは執事だった。2人の両親は存命だが、今はこの家から離れた2つの別邸に夫婦で分かれて住んでいる。

2人いる執事の1人が世話をする母親は重い身体的な障害を抱えてはいるものの、夫婦に不仲などはなく、あくまでイベントに向けた準備に過ぎない。

500万ゴルまでは生活費として使用許可を出されているが、ゴルの保管は執事に一任され、ホソーイたちは金庫を開けることができない。

「まー、僕なら壊せますけどねー、金庫。というか親御さんのそれと、マルーイさんの行動ですけど、両方とも運氣に関係してますー？ いやいやそれよりも3ヶ月でしょ、500万てなんですかそれー」

頷くホソーイの鼻から粘着質な液体が垂れた。

汚いな、何かの拍子に飛んでこないといいけど、いやそれよりも500万は高すぎないかと思いつつ、アイスは得心していた。

今朝の水汲み、ムッケとピッコンの依頼、マルーイの暴挙、両親の不可解な別居。ユルリの県民はイベントで良い結果を出すために様々な行動を起こす。

だがその多くは根拠に乏しく、言ってしまうえば思いこみに基づいたものに過ぎない。少なくとも、自分から見れば。

アイスは思う。これで今夜の県令への対応が決まった。深い事情も聞かずに必要以上の傷を負わせたことをマルーイに謝り、今夜は泊めてほしいと願い出る。

ホソーイ快諾、だがマルーイは反対。兄は妹を諭していたが、意志は強固で変わらないようだった。

そこで、アイスが提案を持ちかける。

「29万9000ゴルにしましょうかー？」

沈黙が流れた。

*

「美味しかったですー！」

ナイフとフォークを使うのは何日かぶりだった。調味された食事を食べるのも同様。上機嫌になったアイスは、料理を用意した執事、スプーンに拍手を捧げる。

「いやー。すごく料理上手ですねー」

「いえ。とんでもございません。まだまだ旦那さまにはご満足頂けないような腕でございますので」

響きの良い声で深々と頭を下げるスプーンは、30歳とまだ若い。ホソーイの両親への恩義から今の仕事に就いているとのことだった。

彼の身の上に興味はなかったが、アイスはその真摯な対応に好感を覚えている。

「なんか、すみませんねー。マルーイさんとは打ち解けられそうになくてー」

ホソーイへ投げたその言葉とは裏腹に、バタフライテーブルの左甲板に積まれた30枚の1万ゴルコインを見るアイスの顔は、明るく歪んでいた。

「さてー、そろそろ県庁に行ってきますねー」

この部屋の時計は中央にある噴水の台座に取り付けられている。

見にくいことこの上ないし、水に濡れて壊れるんじゃないのか、意味がわかんないと文句をつけたくなるのを堪え、アイスはバックパックを背負う。

モンク靴を履き、ホソーイとスプーンに見送られて家を出た。

「さぶいー」

分かっていたが、薄い霧が漂う夜の町は寒かった。

アイスは手を背中に回し、受けた傷の完治を確認。服が破れていることを思い出し、バックパックの中のスペアに着替えようかと考えたが、服装に気を遣う必要があるような厚遇を受けるとは思えないので、気にせず県庁へ出向くことに。

「自然治癒解除、耐冷+3ー」

アイスの体温が急速に上がる。

県令とは特に約束の時間を決めていないので、急ぐ必要はなかった。

路端に連なる商店に立ち寄り、頭に触れもしない幌^{ほろ}を鬱陶しそうに手で払いながら、アイスは嫌そうな顔をす
る店員に細かな商品の説明を求め、ひとしきり聞いたあと、何も買わないで立ち去る。

ふらふらと辿り着いた何軒かの店で同じような冷やかしを繰り返していたが、怒った店主に追いかけられたこ
とでアイスは懲りた。

スポンに手渡された手書きの地図を頼りに、アイスはヘッドライトを点した電気車がすれ違う歩道を歩いて
いる。

冷やかしは止めたものの、目についた県民や車に手を振ったり、声をかけたりを繰り返しながら時間をかけて
県庁前広場に着き、正面の建築物を見上げた。

(これはまた、変わってるなー)

県庁と銘打たれているからには堅苦しい感じの建物だろう。

アイスはそう予想していたが、丸かった。電気車が横に何百台も並ぶほどの広さ。四角い土台に白く丸いテン
トを被せたような形状。

(.....サーカス、かー)

どこかで見たことのある形だと思っていたが、9年ほど前に国府を巡業で訪れていたサーカス団のショー会場
だと気づき、アイスは眉をひそめた。

大きさの違いこそあれど、記憶にあるそれと似たものが本当に県庁なのか。

疑問に思うアイスだったが、県庁という文字が刻まれた御影石製の案内板を広場の片隅に見つけ、道に迷った
わけではないと知る。

広場に人の姿はほとんど見られず、サーカスのキャスルテントに似た県庁だけが健在な雰囲気醸している
。

アイスはその雰囲気に向かって歩を進め、守衛すらいない、誰でも自由に入退出できるであろう小さなドアを
押し、県庁の中へ。

ユルリ県 9話

ドアの向こうは、外観と繋がっていなかった。商業課や納税課などの様々な課が15個あり、それらが等間隔に間仕切りされた空間。

奇抜な外観からは想像できない、いかにも公的施設といった内部構造に驚き、アイスは足を止めた。

「県令とお約束の方ですね？」

見事なまでに外観との調和がない。と険しい顔で周囲を見渡すアイスの元へ、栗色の髪を腰まで伸ばした若い女性が近づく。

険しい表情を保ったまま、アイスは怪訝そうに頷いた。黒いタイトスカートの女性が均整のとれた体を翻し、県令室までご案内しますと言う。

不必要に腰をくねらせながら歩く後ろ姿を嫌悪感たっぷりの視線で追いながら、アイスはさりげなく周囲を確認する。

足元の石畳はそのままに、課名を表す金属製のプレートと県民へのお知らせの紙が張り出された鉄製の間仕切り。その前に1つつづつ置かれている、どう見ても座り心地の悪そうな鉄製ベンチ。

「午後3時までが受け付け時間ですので、もう県民の方々はおりません。夜に背の小さな少年が来た場合はお通しなさいと言われておりましたので」

胸の谷間を開放し、強調させたブラウスを纏う女性が笑顔で振り返る。その視線が自分の胸元にあるクリスタルに向けられていることには気づいたが、アイスの目は胸の谷間に奪われていた。

アイスが何を見ているかを捉えたのか、女性は勝ち誇ったような顔になり、くりっとした栗色の瞳に悦の色を光らせる。

その心情を察知したアイスは渋い顔で目を逸らし、自分らしく文句をつけた。

「.....背が小さいは余計ですねー」

あらごめんなさい、と女性は謝り、アイ스에背中を向けた。

さっきよりも腰をくねらせているような気がしなくもない、とアイスは怪訝な顔になっていたが、女性の胸に弱い自分を無性に腹立たしく思っていた。

県令室は県庁の^{さいおう}最奥に位置していた。

他の課と同様になんの装飾も施されていない鉄の間仕切りに、県民へ向けたお知らせの紙。特に部屋の幅が広いわけでもなく、県の最高権力者たる県令の威厳らしきものは何一つも感じられない。

まあ、少なくとも派手好きな県令ではないな、その点には好印象を抱き、アイスはドアをノックした。

「どうぞ、お入りください」

リュクスまで旅をするのだから高齢ではないだろうと思っていた。

だが、中から響いたのは嘎れた声。意外に思いつつ、ドアを開けたアイスの目に飛び込んだ光景。

不死鳥を象ったガラス製のシャンデリアから落ちる、暖色の光。ホソーイの家にもあった、黒曜石のバタフライテーブルと真綿のような座り心地のクッションが乗せられた椅子のセット。

ゆうに10人は腰をかけられるであろう、光沢のある皮製のソファの右脇には白樺^{しらかば}の本棚が4つ。

ソファの正面に置かれた大理石の執務机の向こう、大きな窓との間、リクライニングチェアに白髪の男性が座っていた。

その右隣には標準的な成人男性の体格に茶渋のスーツを纏い、禿げ上がった額に銀縁眼鏡をかけた彫りの深い顔の中年男性。左隣には同じく銀縁眼鏡をかけたケロコンが無表情に立っている。

「あの一、その眼鏡は管理隊の支給品ですかー？」

まだ促されてもいなかったが、アイスはソファに腰を下ろす。決して長くはない足を投げ出すように組み、薄い笑みを浮かべながら思う。

状況と雰囲気から察するに、スーツの男が管理隊の隊長だろうと。

「そうじゃろう、そうじゃろう。ほれ見たことか、言わんこっちゃないじゃろう。お主ら兄弟の悪趣味な眼鏡は評判が悪いのじゃ」

少なくとも銀縁眼鏡についての意見は一致しているようだが、この県令はどんな人物だろうか。アイスは観察を始めた。

まず、アイスが目を留めたのは老人の白髪のボリューム。

(三角一)

意図的にそう整えているのだろうが、上に向かって緩やかに先細りしていく不思議な髪のに、モグラが穴を掘り始めてしまいそうな高さで横幅。

髪はそれぞれ焼きごてを当てられたように曲がっていて、顎から伸びる白い髭も同様。

だが、顔を含めたその他のパーツはごく普通の健康的な老人、といった感じだ。アイスの目は老人の髪に釘づけになっていた。

「どうじゃ、イカス髪型じゃろう」

誇らしげに背を反らす老人に頬を引きつらせて頷き、アイスはスーツの男を一瞥する。どのくらいの腕前なのか予想もつかないが、ケロコンと兄弟、外見の印象からして兄と思しきこの男も、強化士の可能性が高い。

面倒くさい展開にならないよう、アイスは注意を払いながら言葉を紡ぐ。

「県令さんですよー？ 僕がここに来た理由は2つですー。県を運営するにあたり、困っていることはありませんかー？」

困っていること自体には微塵ほどの興味もないけど、と思いつつ、アイスは真剣な顔で言う。

「いや、特にないのう」

「あ、そうですかー」

県令の答えは想定どおりだった。そして、今から自分が言う言葉に対する反応も同じだろう。アイスは薄い笑みを保ったままで続ける。

「じゃあ次ですー。実は僕、この県をすごく気に入ってしましましてー。ケロコンさんには明日で県を出ると言ったんですがー、明後日の夜まで滞在を延ばしたいのんですがー？」

スーツの男性は仏頂面を保っているが、ケロコンが目をわずかに左右へ動かした。これを動揺と捉え、アイスはケロコンに問う。

「いやー、ケロコンさんに滞在は3日で済みますね、と先に言われたので、何も考えずに同意しちゃいましたけどー」

「アイスどの、僕の両脇にいる兄弟は説明下手での。すまんのう。実は、ユルリに訪れる旅人の滞在は3日までと県法で定められておるんじゃ。じゃから、ケロコンはそのように言ったのじゃ」

県令は刺激的な外見とは違い、好々爺だった。

顔じゅうの皺を総動員、不自然なまでに柔らかい笑み。机に両肘を立てて両手を組み、その上に顎を乗せ、緑がかった瞳でアイスの目を真っ直ぐに見つめている。

「あ、そうですかーじゃあいいですー」

あっさり引き下がったことに違和感を覚えたのか、県令の満面の笑みに少し陰が差す。もしかして、県を出てもらうためにゴルでも用意しようと考えていたかな、と多少気になったが、そんなことよりも、とアイスは静かに立ち上がった。

「明日の昼に北側から県を出ますー。ケロコンさん、武器はちゃんと返してくださいよー？ 獣たちと戦いづらくなりますし、あれは借り物なのでー」

ケロコンはブリッジに人差し指をあて、少しずり落ちた銀縁眼鏡を直してから、首を縦に振った。次にアイスはスーツの男にも目を配ったが、男は終始一貫して感情を見せていない。

意外にやっかいな相手かもしれないな。眉を吊り上げたアイスは、男の禿げ上がった額を凝視したあと、聞き残しがあることに気づいた。

「あー。ところで、県令さんのお名前を聞いてませんでしたねー？」

「これは失礼した。僕の名は、ケインじゃ」

「そうですかー。ケインさんですねー」

あれ、意外と若い名前だな。踵を返して出口へと歩き出し、アイスはすぐに両足を揃えて足を止めた。顎の関節を痛めたように口を半開きにして振り返る。

「あなたはまともな名前なんですかー……」

県庁室を出たアイスへ、先ほどの女性が出口までご案内しますと声をかける。

県令の名前を知ったせいか、今の状況を馬鹿らしく思うようになったアイスは、ひどく不機嫌だった。女性がブラウスの前立てボタンをさり気なく1つ外したことに気づき、そこだけは律儀に一瞥したものの、女性に冷えた断りを入れ、早足で出口へ。

聴力を付与して県令室の会話を聞こうか。

そんな考えが頭を過ぎったが、考え直した。

この県に対して自分がやることは決めたんだから、相手はどう出ようと関係ないか、と。

県庁を出て、その外観を振り返り、アイスは元から細い目をさらに細めて鼻を鳴らす。

このキャスルテントふうのデザイン。間違いなくあの奇抜な髪型を誇る県令の趣味なんだろうと。

行きとは違い、アイスは寄り道をしなかった。県民との接触は避け、ホソーイの家を目指す。

行きに冷やかashiをして歩いた商店街は剛性と脚力+3を入れ替えて駆け抜け、多少の罵声を浴びたものの、事なきをえた。

いつからそうしていたのか、ホソーイの屋敷のドア前に立つスプーンの姿があった。

本当にこの人は仕事熱心だなと思ったアイスはお礼を言い、スプーンに続いて家に入る。

居間には兄妹の姿があった。2人とも傷の治療を終えたのだろう、痛そうな顔をしていない。

もう大丈夫かな、とマルーイに声をかけたアイスだったが、微塵ほどの反応もなかった。

「.....あー、忘れてましたー！ 直さないとー」

気まずく思ったアイスは、やけに元気な声で脚力と剛性+3を入れ替えた。

ホソーイがマルーイに態度を軟化するように諭すが、妹は兄の言葉を聞き入れる様子を見せない。

(関係改善は無理そうだなー)

不得手極まりない人間関係の改善を諦め、アイスはバスルームを借りることにした。

ラバトリーに用意されたタオルやバスマットの上質さもさることながら、埃ひとつ落ちていないように見える清潔さ、ゆうに全身を浮かべられる広さの大理石製バスタブ。

リッチな人間の暮らしを垣間見たアイスは、自分の育った環境との差に複雑な気持ちを抱かずにはいられなかった。

バスルームを出たアイスを爽快感が包む。

微風が吹いてくる方向には据え置き型のファンが置かれている。稼働に電気を必要とする電機でんきに必要不可欠な発電器は、内蔵型なのか、外部には見あたらない。

入るときには置かれていなかったはずだから、自分が出るころに合わせてスプーンが用意してくれたんだろう、とアイスは感心。

だが、問題発生。置かれていたバスローブを着る方法がわからない。

「なにこれー」

スポンが戸惑う声に気づいて駆けつけたが、アイスを見て言葉を失っていた。

「あー、気にしないでくださいー。傷は、刺激的な家庭環境の産物ですー」

バスローブを纏い、その柔らかな肌ざわりに上機嫌になったアイスが歯の掃除を終えて居間に戻ると、破れた上衣の替えとして、同じような形の黒い上衣が用意されていた。

測ったようにフィットするサイズで、肌に触れる質感は絹のごとき。

アイスは3人にお礼を言い、国府との違いについて雑談をしたあと、ようやく柔らかなベットで眠れる、と浮き足立ちながら来客用の寝室へ。

ベットはどこにあるかな、と部屋を見渡したアイスがすぐに見つけたのは、部屋の四隅から対角線上に伸びたハンモックだった。

「素晴らしいでしょう。ハンモックはとても珍しいですから、お客様はお喜びになります。ですので、お客様用の寝室はベットの代わりにハンモックを設置しております。バランス調節用に重さを調節した板を敷いてますので、翌朝には背中が少し痛くなってしまうのが難点ですが」

振り返ると、スポンの満面の笑みがある。

アイスは5秒ほどの間を置いてから応えた。

「……そうですねー……」

結局、寝相が悪いアイスは、揺れるハンモックに適応できず、満足な睡眠をとることができなかった。

カーテンの隙間から矢のように降り注ぐ初春の朝日を浴びながら、粘り気の強い飴のように纏わりつく睡魔と戦いつつ、眠気を覚ますような強化があればなあ、^{もや}霽のかかった頭でぼうっと考えている。

(ダメだ、行動開始しないとー)

んーっと声を出して背中を伸ばし、アイスは痛む背中を気にしながらバスローブを脱いだ。

シルクのような手触りの上衣とゴワついた下衣に着替え、好きになれなかった部屋に忘れ物がないことを確認、バックパックを指にぶら下げ、部屋を出る。

居間で3人と合流。

スポンが用意したワイルドターキーの丸焼き、粉状にしたブルーチーズをまぶした採れたて青野菜のサラダ、チキンブイヨンスープを胃袋に詰め込む。

報酬のゴルコインを嬉しそうな顔でバックパックに納めてからラバトリーに向かい、旅に向けて念入りに上半身を清めた。

「あの、今日じゅうに出ればいいんだから、まだここにいてもいいんでねえですか」

マルーイの部屋の前、ドアの向こうの主^に別れの挨拶を投げたアイスへ、ホソーイがおずおずと言う。

横に並ぶスポンも強く同意。アイスは2人の態度に少し驚いていたが、急に何かを思いついたような顔になり、ここで初めて旅の内容を説明。

「あの……どして罪人扱いされでたんですか」

聞いていいのかどうかの確信が持てなかったのか、ホソーイが探るような口調でアイスに訊ねる。

「え？ あー、あるオッサンが権力にものを言わせて何人かの少女によくないことを強制してたのでー、半殺しにしちゃいましたー」

「だ、誰を……？」

「副府長ですーじゃあ、そろそろ行きますねー」

口から出た名前の大きさにか、顔を強ばらせている2人に小さく手を振ってから背を向け、アイスは意気揚々と階段を下りる。

その勢いのままに、自分の生育環境とはかけ離れた生活水準の家を飛び出していった。

ユルリ県 11話

昨日と同じ、晴天に限りなく近い青空。

ホソーイとマルーイが送り出す声を背中に受け、時計塔の影の向きから北を判別、アイスは駆けていく。マルーイの件はあれど、自分にしては人間関係を上手くやれたほうだ、そう思いながら。

街の外れへ行くにつれて商店の数が減り、代わりに民家が増えている。

庭先でガーデニングを楽しむ県民がギョツとした顔でアイスを目で追っているが、アイスのほうも驚くべき光景に目を剥いていた。

裸でベランダに立ち、腰に手を当てて朝日を浴びる一家、窓際で枯れた植物にミルクを与える少女。

トイレの窓からやけに上手いラッパの音、外壁が白い家のドアを黒いペンキで一心不乱に塗りたくる壮年の男性、路端で鳩をしめながら泣いている少年。

そのどれもが明日のイベントに向けてのジnkスを追い払う儀式、験担ぎに違いない。

すれ違う瞬間に見ただけだし、自分が見ているものはごく一部に過ぎないはず。

今日はユルリの至るところでこのような光景が繰り広げられているんだろうな。

そう思うアイスの胸に、バカらしさが到来。

15メートルくらいはあるだろうか。

北の端に辿り着き、鉄の壁を見上げて高さを推測するアイスの目の前には、県に入った南側と同じ8メートル近い高さの重厚な鉄門がそびえている。

「おはようございます、アイスさん。昨夜はどうもありがとうございました」

ケロコンが鉄壁のへりから顔をのぞかせた。

落ちないように銀縁眼鏡のブリッジを右手で押さえる顔がやけに青白いことに気づき、アイスが応えた。

「おはようございますー。というか、ケロコンさん、ずいぶん顔色が悪いですねー。もしかして、寝ないで待つように命令されてたんですかー？」

アイスに問われ、ケロコンは虚を突かれたような表情を垣間見せた。

だがすぐに真顔に戻り、ごほん、と咳払いをし、どうしてもズレてしまう銀縁眼鏡の位置を直す。

「いえ、命令されたわけではありません。本来、クリスタは県にとって大事なお客様ですので、何時に来ても対応できるよう、自主的に番をしていたんです」

「そうだったんですかーそれはご苦労さまですー。実際、僕も伝えた時間より早くきてますしねー」

この眼鏡男、取り繕うのが上手いなあと感心、アイスは偽の笑顔を浮かべてそう応えた。

もう今さら牽制をしたところで生産性のある情報は手に入らないだろう、と本題に入る。

「県を出ますので、武器を返してもらえますかー？」

ケロコンが頷き、高い音階の指笛を鳴らした。

数秒後、鉄門が軋みながら左右に開き始め、何キロにも渡って続く緩やかな斜面が目に入った。

「……県を出てから、ってことですかー？」

なんとなく疑問形ではあったが、アイスは疑問に思っていなかった。

どうせ、少し離れた場所に武器を置いているとか、そんな感じだろうと。

「はい。大変に申し訳ないですが、あなたに県内で武器を渡すのは危険と判断していますので」

あの言いぐさ、ホソーイたちを相手に暴れたことが伝わっているかもしれないな。

アイスはお決まりの台詞を言う。

「請求は国府長へお願いしますー」

開いた鉄門の間を歩き、頭上へ向けて朗らかな声を出したアイスの紺藍色に染まった髪を、斜面を滑り下ってきた冷やかな風がふわりと持ち上げる。

「……お手数をおかけしてしまいますが、お預かりしていた武器は、その斜面を200メートルほど登ったところに置いてあります。調べたところ、あの2つは相当に高価なものだとわかりましたが、盗まれたりはしていません。望遠鏡で監視していますので」

ケロコンによる、武器の場所を告げる声。

アイスは振り返らなかった。歩きやすいように整地が施された斜面を、踏みしめるように登っていく。

鉄門が元の位置に収まろうとする音が響いた。

深く青いサファイア製の棍こんと、幅広で木目状の模様をもつ短めの刀身が特徴となる、ダマスカス鋼製のグラディウスを拾い上げる。

武器と共に置かれていた二点止めの肩かけベルト鞆に棍を、腰ベルト鞆にグラディウスを納め、それぞれを背中と腰に装着。

この間にアイスは剛性を解除、感覚+3を付与。

背中に視線を感じていた。

ケロコンかどうかは不明だが、誰かに見られている感じは強い。ケロコンが望遠鏡を持っていることを明かしたは、すぐに県を離れろという牽制だろう。

アイスは、あ一面倒くさいな、と頭の中で舌打ちをしつつ、感覚と脚力+3を入れ替える。

山砂が敷き詰められた斜面を一気に駆け上がり、もうそろそろ大丈夫か、と判断したところで脚力と感覚+3を入れ替えると、視線は感じなくなっていた。

とはいえ、あくまで自分の感覚に過ぎない。

知っているよりも優れた性能をもつ望遠鏡という可能性もある、とアイスは登り続けた。

途中、リスなどの小動物は見かけたが、斜面の両際に設置された鉄刺網てっしもうのおかげか、大型の獣の気配は今のところない。

(この強化、相変わらず落ち着かないなー)

多くの強化が限定的な箇所へ効果を及ぼすのに対し、感覚は毛並みが違う、アイスはそう感じていた。付与すると五感の全てが鋭くなり、付与値が大きい場合、肌を撫でる風にさえ、人に触れられたときのような感触を得ることになる。

神経が疲れるため、長時間の付与は避けることにしていた。

登り続けた先に、鉄刺網の終わりがあった。

アイスはリュクスの方角へ向かったように見せかけるため、自然な動作を意識しつつ右の森へ折れる。念のために視線と周囲の気配を確認し、安全だと判断、感覚を解除し、剛性+3を付与。

「さてさてー」

そう独りごち、アイスは何かを探して歩き始める。

グラディウスを抜き、木々を薙ぎ払いながら進んだ先に、太い幹をもつ大木があった。

その手前で立ち止まり、木に穴がないことを確認。バックパックを大事そうに背中から下ろす。

(まずはいつものからー)

グラディウスを左手に持ち替え、自分の身長より少し長い棍を利き腕の右手に持ち、深呼吸。

全ての強化を解除、編成を脚力と体幹を+3、腕力を+4とする。

ふ、と短い呼吸のあと、武器を預けていたユルリでは行えなかったアイスの日課が始まった。

まず、左。次に右。瞬く間に左右の木が砕けた。

宙に舞う6本の枝をグラディウスで瞬斬し、後ろに向けて棍を突き、背後のナナカマドを粉碎。

体を反転させながら跳び上がり、折れ落ちてくるナナカマドの幹にグラディウスを突き刺し、着地と同時、軽石であるかのようにナナカマドを軽々と投げ飛ばす。

ユルリ県 12話

投げられたナナカマドが他の木々に衝突、強いものはそれを弾き、脆いものは力なく倒れていく。

小さな猿だろうか、小動物が走り去る姿を視界の端で捉え、アイスはグラディウスを左斜めのイチョウに投げ刺した。

寸瞬、深青の表面に煌びやかな陽光を反射させた棍が、グラディウスの刺さる木に穴を穿つ。

アイスは踏み込と共にグラディウスを抜いた。左斜め後ろの空気を斬り裂き、正面にある大木の側面に棍を叩きつける。

「ふいー」

耐冷を付与していないが、激しい動きを経た体はじゅうぶんに温かった。

アイスは汗を搔いていない額をグラディウスを握ったままの左手の甲で拭い、首を傾げる。

「あれー？」

探しまわって見つけた大木がバックパックの脇に倒れていることに気づき、やってしまったな、と苦笑いを浮かべる。

棍とグラディウスを納めたベルト鞆を外し、その場で四つん這いになり、肘を限界まで曲げては元に戻す運動を開始。

100、200、300。

木漏れ日が溢れる森の中、アイスの腕の屈伸運動は600回を迎えたところで終わりを告げた。

額から大粒の汗が流れ落ちているが、アイスは拭わずに次の運動に入り、その汗を宙に舞わせる。

ふくらはぎと太ももの裏を接触させ、すぐに立ち上がる。これを繰り返す運動を300回で終えた。

アイスは おもむろ 徐に駆け出した。

密集する木々に体が触れないように、まずは6割の速度で走る。

6割が7割になり、8割に。やがて全力で森を疾走し始め、周囲をぐるりと回り、武器の傍で急停止。

まだ肌寒さを感じる季節だが、アイスの全身は汗だくだった。猫のように全身を震わせて汗を飛ばし、武器とバックパックを回収。

アイスは体を清めるために湖や川を探し始めた。

体が冷えないようにと、歩きながら脚力を耐冷+3と入れ替える。

そうして1時間ほど歩いたところで、アイスは小さな沢を発見。

小さくて入れないけど、まーこれでいいか。

アイスは全速力で全裸になり、手ですくった水を繰り返し浴びせ続け、それなりの爽快感に満足。

乾くの待ち、服を着て森を歩き始めた。

10分ほど経っただろうか。ようやくお眼鏡に適う大木を見つけたアイスは、ユルリの自然保護園でそうしたように、枕を間に挟んで大木に背中を預けた。

一昨日の夜に得た教訓を活かして体幹と腕力を解除、剛性と強靭性を+3で付与。

膝を抱えて目を閉じ、戻ってきた睡魔を手放しで迎え入れ、誘われるがままに眠りへ落ちていった。

寝不足のせいか、アイスの眠りは役割を終えた太陽と夕陽が姿を隠す時間になっても続けている。
金色の光に瞼を刺激されてふと薄目を開けたこともあったが、睡魔とのランデブーを終えるつもりは微塵もないようだった。

次にアイスが目を覚ましたのは、分厚い雲の隙間から覗く太陽がアイスの真上で自分の仕事を始めた時間だった。
茫洋とした瞳で宙を見つめ、空を見上げる。

「……あー」

低く唸り、アイスは背伸びをした。その手が木にあたり、少し驚いた素振りを見せる。
愛用の枕が尾てい骨と木の間に挟まっていることに気づき、緩慢な動作でバックパックへ納めた。
薫製肉とクコの実を取り出して口いっぱい頬ばり、寝ぼけ眼でもしゃもしゃと食事を開始。
金属筒を口に向けて持ち上げ、外気温によってほどよく冷えた水を少しずつ飲む。

空腹を満たし、アイスは静かに立ち上がった。
屈伸運動を開始。主要な関節を回し、稼働に慣れさせたところで大きな欠伸。
口を開いたついでに剛性と強靱性を解除、剛性を+2、脚力を+4で付与。
武器を納めたベルト鞆とバックパックを背負い、それまでの緩やかな動作とは一転、猛然と駆け出した。

(うわ、まずいなー)

寝ているような顔に変化はないが、意識が覚醒するにつれてアイスは焦りを感じ始めていた。
朝には起きて自分が望む行動をとるつもりだったが、太陽の位置からすると、今はもう12時近い。
思いきり寝過ごしてしまった。もう終わっているかもしれない。
そう思うと、費やした3日間がとても無駄なものに思えてしまう。

鉄刺網が左斜め方向に見えてきた。右に曲がればリュクス、左ならユルリ。
アイスは立ち止まり、付与している3つの強化を解除。脚力を+3、強靱性を+2で付与し、呟いた。

「隠密+5ー」

琥珀色の閃光がアイスを包み、霧散。
アイスは躊躇^{ちゅうちよ}を見せずに体を左に旋回。緩やかな斜面を大きな歩幅で下っていく。
望遠鏡で発見される危険性を気に留めていないのか、鉄刺網に隠れるようなこともせずに。

アイスはユルリを外界と隔てる鉄壁の前に姿を踊らせたが、上方に管理隊の姿はない。
この様子ならまだ間に合うかもしれない、と頷き、アイスは編成を脚力と腕力を+4に変更。
背中から抜いた棍に剛性+2を付与、棍を短く持ち、鉄壁を突く。
空いた穴にもういちど棍を打ち込むと、濃い灰色に染まった鉄壁に白い部分が現れた。

アイスは白の向こうを見て満足げに頷き、白の近傍に棍の連打を浴びせる。

鉄壁は脆くも崩れ去り、アイスの背丈を楽に飲み込める大きさの穴が空いていた。

「ほいっとー」

棍を鞘にしまい、穴を潜り、街の中へ。
多くの民家が立ち並ぶが、県民の姿はない。
よし、大丈夫そうだ。アイスは安堵のため息を吐き、大きな通りを避けて路地を走る。
目指すのは、県庁前広場。そして、県民の誰もが詳しい内容を語ろうとしなかった、イベント。

商店が軒を連ねる区域に入ったが、まだ県民の姿は認められない。
開催中だ。アイスは確信を持ち、鉄紺色のクリスタルを鎖骨の間で跳ねさせながら街の中心部へ。

時計塔のあたりで、数人の県民が歩いていた。

アイスは時計店の陰に身を隠す。

2組の夫婦と思しき4人は一様に喜々とした表情を浮かべていた。

男性のうち1人は異常に顔を上気させ、女性2人ともが大粒の涙を落とすその喜びように普通ではないものを感じ、アイスはイベントの正体に対する自分の想像が的外れでないことを確信、4人に見つからないように別の道を選んだ。

そうきゅう 蒼穹 は蒼穹と呼べなくなっていた。その蒼を にびいろ 鈍色の膜に覆われ、本来の爽快感を完全に失っている。
鈍色の下、県民と遭遇しては身を隠しながら進むアイスの髪に、数滴の雨が。
県庁に近づくにつれて天候は悪化し、相反するように異口同音に喜びを語る県民たちの数が増えていく。

これ以上は隠れて進めそうにないな、そう判断したアイスは棍の剛性と腕力を解除、隠密+5を付与、道を歩く県民たちの前に堂々と躍り出た。

妊婦の脇を、子供の前を、老婆の後ろを疾走。

だが、県民ではない人間が近くを走り抜けることに気を留めた素振りを見せる県民はおらず、何事もないかのように談笑と共にアイスから遠ざかっていく。

アイスのほうも、それを当然とばかりに、接触だけはしないように県民と建造物の間をひた走る。

ある洋服店の軒先、ガラス張りのショーケース。内側に置かれた鮮烈なピンク色のワンピースを写す鏡面の外側に、洋服店の前を疾走するアイスの姿は写っていなかった。

まばらに降っていた雨は本降りとなり、雨具を持たない県民たちを濡らしているが、雨の下を歩くその顔は一様に明るい。

急停止したアイスの鎖骨にクリスタルが強く接触、アイスは鈍痛を覚えたが、構う余裕はなかった。

県庁前広場の手前までは来たものの、イベントを終えて帰路についていると思しき県民の数があまりにも多い。

(これ以上は無理かー)

蔵書館の裏手に身を隠し、アイスは隠密を解除、ぐるりと周囲を見渡して何かを思案している。
いつも閉じているように見える目がわずかに開かれ、紺藍色の瞳が蔵書館の屋根を見定めた。

脚力、腕力、視力を+2、聴力を+4。上限値まで強化を付与し、蔵書館の外階段を上る。

4階まで伸びた階段の終わりには屋根の流れがあり、アイスはそれを利用して自分の体を屋根の上に押し上げた。

蔵書館に利用者がいることも想定、音をたてないように忍び足で歩き、屋根の坪みに近い大棟の傾斜に身を伏せる。

寒さを感じつつ、顔だけを起こして覗いた県庁前広場では。

広場の奥には無地の白い布が張られ、県庁の姿を関税に隠していた。

布の前には数百、数千の県民が傘も持たずに15本の列を成しているが、初春の冷たい雨を受け入れる広場はまるで誰もいないかのように静まり返り、聴力を付与したアイスの耳でさえも県民たちの言葉が聞こえてこない。

アイスの位置からでは並ぶ者の顔を見ることは叶わないが、白い布の奥から戻ってくる県民たちの顔は2つのパターンに分かれていた。

これ以上はない、といわんばかりに喜び深い安堵をみせる者と、不安げな顔で列の横を通り過ぎ、広場から出たところで何かを待つ集団に加わる者。

前者は気にかけるべき相手がいない者、もしくは相手にも良い結果が出た者。後者は自分の近親者の結果を待つ者だろう、アイスはそう推測。

かつ、白い布に向かう者たちの異様なまでの静けさはこのイベントにおけるルールであり、破った者には広場の至る場所で武器を携えて立つ管理隊と思しき者らに処罰される、そんなところだろうと。

(列に並ぼうともしてないしー、管理隊員はこのイベントに参加しないのかー。ありがちな、権力者側に属する者の特権、かー……)

よほど癖の度合いが強いのか、雨にも負けずに元気よくほうぼうに跳ねる癖っ毛を指先でつまみながらそう考えていたアイスだったが、他の列と比べて並ぶ県民の列が顕著に短くなった列の最後尾に数人の隊員たちが並んでいることに気づき、目を見張る。

身分による例外はなく、全県民に参加義務がある。だとしたら、何を目的にしたイベントなのか。

詳しい内容を知りたいと思うアイスだったが、ここに至り、自分の行動に対する違和感を感じてもいた。

イベントの内容を確認することに対して命令や依頼を受けたわけでもなく、当然ながら報酬を得られるものではない。

なら、先を急がなければいけない旅の身で何のためにユルリへ戻ってきているのか。

国府長が言っていた。

クリスタルを通じて、この旅で自分が見てきたものを確認できると。無事に国府へ帰還できたとしても、難癖をつけられたりしないだろうか。

「……まー、5万ゴルは高かったしねー」

考えた末にアイスが出した結論はこうだった。

強化の指南代としてホソーイから受け取った報酬は高すぎた。

ちょっと話ただけで5万なんて、どこぞの悪徳業者のようだ。もらい過ぎたぶんで、ユルリで起きているはずの問題を調べて、何かやれることがあれば。

自分を説得するように葉として発し、うん、と大げさに首を縦に振り、大棟に下顎を打ちつけて悶絶。

左目じりに涙を溜めて広場を見上げたアイスの視界に、白い布から出てきたケロコンの姿が目に入った。

痩せこけた顔に表情はなく、広場の端に設置された布の支柱となる、10メートル以上はあるように見える鉄の棒の前に立ち、雨を落とす雲を見上げている。

その後ろに民家と思しき建物があることを認めたアイスの瞳に力が籠もる。

「うん。行きますかー」

ユルリ県 14話

体を反転させ、滑り落ちるように蔵書館の屋根から下る最中に聴力と視力を解除、強靱性+3を付与、モンク靴で水しぶきを飛ばしながら着地。

周囲に人の目がないことを確認、腕力と脚力を解除して隠密+5を付与、建物の陰を利用しつつ、広場の外縁を反時計回りに駆ける。

怪訝そうな顔で自分が通った道を見つめる県民たちがいることには気づいていたが、彼らが認めたのは自分の姿ではなく、靴がたてる水しぶきだけ。

アイスはそう認識していた。

それが、性質や物理的な現象以外のものに強化を施す特殊強化に属する隠密の効果。

何の前触れもなく頭に原字が浮かんだ、自分だけが使えるはずのもの。

建物の切れ間を通るときに遭遇する県民の数の少なさと、雨による視界の悪さが重なったこの状況を合わせれば、特殊強化においては最低の付与値となる+5でも姿を見られる可能性はないと踏んでいる。

姿を見えにくくし、かつ気配を抑える隠密には脚力を強化する効果もあるが、アイスは可能な限り速度を落として外縁を回っている。

建物の角を曲がった県民と接触する危険を考えての判断でありそれは実功を奏した。

こういうのは小さいころから受け続けた戦闘訓練の賜物なのかも。

あの両親に感謝できることはないけど。

もう息をしていない両親の顔を閃光のように思い浮かべ、打ち払うように頭を振り、アイスは走る。

変わらずに広場からの物音は乏しいが、幾つかの列が少し短くなったころ、アイスは目標を視界に捉えていた。

ケロコンは屋根の上から確認した位置よりもやや手前に移動していたが、広場に向けて装飾品を並べている店の前に立っている。

その左手にある極端に細身の剣を刺突に適したエストックと見定め、アイスは得心し、対応を練る。

(なるほど一。けっこう珍しい剣だ一)

初日の夜にケロコンが示した武器への強い関心と合わせて考えると、武器のコレクターか何かなのかもしれない。

ただ、そうだとしたら、エストックだけが武器じゃない可能性も。体に潜ませる暗器の類にも気を配る必要があるようだ。

3歳から、13年間。友達を作ることすら許されず、恋人など^{もっ}以ての外。

1段に近い力を持つ2段強化士だった母親から強制され、ただひたすらに戦闘訓練を積んできたアイスの経験と知識が選んだのは、技量の知れない相手を手早く制圧するに有効な手段、速攻だった。

「強靱性、隠密解除、剛性+3、腕力+4」

ケロコンは強化士だ。

聴力を付与して周囲を警戒している可能性がある、アイスは可能な限りに声を抑えていた。

上限値まで+3の余地を残したまま、ケロコンが背を向ける商店の裏側、石の壁を腰の回転が乗った^{しょうていだ}掌底打で崩し、突入。

正面にあった商品棚を弾き飛ばし、目を見開いて振り向いたケロコンの胸ぐらを掴んだ。

「遠心力+3ー」

琥珀色の瞬光が霧散すると同時、店の右奥、使われている形跡のない古い形式のディスプレイカウンターへ、蠅のごとき速度でケロコンが飛んでいく。

背中をガラスに強打、降り注ぐガラス破片の下敷きになったケロコンの体を、背後に回り込んだアイスが左手で持ち上げ、エストックを拳で弾き飛ばす。

ケロコンは腕力+3を付与。

至近での閃光には目くらましの効果もあるが、嫌というほどに強化を付与した近接戦闘の技術を叩き込まれてきたアイスは事前に顔を背けていた。

ケロコンの腕力の付与値が自分の付与値に及ばないことも聞き取ったうえで、グラディウスを喉仏に寄り添わせる。

「無駄なことはしないでくださいー」

言った矢先、足下で靴を叩きつける音。ケロコンのブーツの踵がべろんと剥がれ、血のように赤い刃が飛び出し、アイスの脛に接触。

だが、アイスの予想どおりに刃は剛性を付与した皮膚を貫けない。

「やめてくださいー。かなりの無駄ですからー」

背中からガラスを生やし、出血もかなり多い。それでもケロコンは抵抗を止めなかった。

首を掴まれて持ち上げられ、喉にグラディウスを突きつけられながらも手足をばたつかせ、もがく。

面倒くさいな、とアイスは深いため息を吐き、ケロコンの頭をガラスを失ったカウンターへ押しつけた。

「強化士ならわかるでしょー？ 無理ですよ。この状態は不利すぎますー」

諭すような口調で言い、アイスは床に落ちていたケロコンの銀縁眼鏡を蹴り飛ばす。

こんな状況でも銀縁眼鏡の行方を目で追うケロコンに眼鏡への執念めいたものを感じながら、アイスは解放の条件を告げる。

「誰かが気づいてここに来る前に、白い布の向こうで何をやってるのか、教えてくださいー。ちゃんと答えてくれたら、明日を無事に迎えますよーたぶん」

「こっ、こんなことをして……」

あれーこんな声だったかな。アイスは記憶にある声との違いを感じていた。

ところで、裸眼で自分を見つめる仕草を見る限り、視力が悪いというわけでもなさそうだ。あの悪趣味な銀縁眼鏡はファッションだったのだろうか。

声の違和感を忘れ、銀縁眼鏡のほうを質問してみたくなったが、アイスは堪える。

「何か問題がありますー？ どうせ、ろくでもないことをやっているんでしょー、あの中で」

県庁を覆う白い布のほうに顎を向け、アイスは考えていた。

直情的にケロコンを叩き伏せてしまったが、このクリスタルはどこまでを記録しているのだろうか。

今とこれからの行動も情報として蓄えたとしたら、あとで厄介なことにならないだろうか。

表面に写った人の情報を蓄える。アイスは刑鑑所で聞いた国府長の言葉を思い出す。

(あー)

閃いた、とばかりに大きく頷いたアイスを、ケロコンの怒りに燃えた瞳が凝視している。

アイスも気づいていたが、構わずにケロコンを強く押さえつけ、グラディウスを握ったままでクリスタルの鎖をつまんだ。

小指を襟元に引っかけて隙間を作り、クリスタルを落とす。

アイスの行動の意味がわからないのだろうか、面をくらったような表情のケロコンに、満面の笑みを浮かべたアイスが言う。

「問題はないですよー」

確信ではないが、アイスには自信があった。

国府長はあの言葉を脅しの意味もこめて言っていたはず。クリスタルが人以外の情報も蓄えるなら、わざわざ人と限定せずにそのまま表現するだろう。そのほうが脅しとしての効果は高いし。

ケロコンに動く気配を感じ、アイスはグラディウスを元の位置に戻し、言う。

「ケロコンさんの姿が見えないとか、物音に気づいたお仲間が来るかも知れませんよー？」

手を少し脇の方向へ引けば、ケロコンの喉を簡単に斬り裂ける。

己が置かれた状況を喉の持ち主に理解させるべく、アイスがグラディウスをわずかに引くと、喉から鮮血を滴らせたケロコンが体を震わせた。

「……教えておきますけどー、僕には副府長を殺しかけた経験があります。やる時はやりますよー？」

「副……うっ、嘘だろ。そんなことをした人間が生きていられるわけがない！」

「本来ならそうですねー。だからこそ僕はこうして旅をしてるんですよー」

自分では罪とも思っていないが、国府長から押しつけられた贖罪のために旅をしている。
そのような意味をこめて伝えたアイスだが、ケロコンの口から出てきた言葉は意外なものだった。

「くっ、クリスタじゃないのか……」

一瞬、眉根を寄せて首を傾げかけたが、アイスは自分がクリスタを騙った逃亡者であると伝わったらしいと考え、それはそれで微妙に嫌だなと思いつつも、面倒くさいので否定はしないことにした。

「で。どうしますー？ 聞いた内容に納得できたら、このまま県を出ますよー？」

逆に言えば、納得できなければ県から出るつもりはない。その脅しを裏にこめての陽気な口調だった。
猫に似ていると陰口を叩かれてきた自分の顔と、寝ているような細い目では、睨んでも脅しが伝わらないことを理解しているが故の、アイスの常套手段。

「ぴゅーっ、ぴゅーっ」

突然、鼓膜を刺激する高音が鳴り響いた。

頭を伏せたケロコンの口から響いた音だと気づき、アイスはケロコンの頭を首の稼働範囲いっぱいぐいと持ち上げた。

「近くの管理隊がくる」

口の端から血を垂らしながらアイスを斜めに見上げるケロコンの舌に、中央に穴が空いた肉厚の輪に似たものが。

口の中に隠し持っていた笛のようなものか、声を変ったように感じたのはそのせいかと考え、苛立ちを覚えたアイスが言う。

「あの、状況を理解できてますー？ ケロコンさん、このまま話さずに人が来たら死ぬんですよー？」

「はっ……笑わせないでくださいよ、クリスタどの。この県でも犯罪は起きる。いいか、人を殺した者には決まったパターンがあるんだ」

顔を歪めたケロコンが挑発的な目で睨む。

今さら何を言うのか。と頭に血を上らせながら、アイスは外で人がざわめく気配を感じとっていた。

「元から人を殺せる顔をしているか、殺してから人を殺せる顔になるか。このどちらかだよ、クリスタさま。アンタは人を殺したことはないでしょ？」

「……だったらー？」

「無理ですね、アンタには。アンタ、ここにいるのも誰かに頼まれたわけじゃないだろ。そんなことを頼む者は絶対にいないからわかりますよ！ そういう奴は人を殺せたりしないんだよ！」

アイスは口をっく嚙んだ。暴れるケロコンをもういちど押さえつけ、そのまま数秒。

広場のほうからケロコンの名を呼ぶ声が近づくが、それ自体は大した問題ではないと考えていた。

問題なのは、ケロコンの喉に寄り添わせたグラディウスを斜め手前に引くことができるかどうか、自信を持ってないこと。

「どうしたよ、クリスタさん？ 部下たちが来ますよ、やるなら今だよお！」

アイスは沈黙していた。

グラディウスを握る右手に力をこめては抜きを繰り返し、その幅広の刃が小刻みに震えていた。

ケロコンは押し黙るアイスへ、愚弄するような言葉を浴びせる。

「アンタ、優しい親に育て」

言葉を切ったケロコンの細い喉の下から姿を現したグラディウスの刃が赤く染まっている。

アイスはグラディウスを一瞥、間隙なくケロコンの顔をカウンターに叩きつけると、ケロコンの上半身がびくんと大きく跳ね上がり、力を失う。

「……わざわざ、質問するまでもなかったですねー」

広場に面した壁に身を隠し、サーベルを手に駆け込んできた5人の管理隊のうち、最も近くにいた者の腕を掴む。

その腕の細さに驚き、相手が少女と気づく。

思わず力を緩めたアイスが投げるように言った。

「あー！ やりづらいー！」

少女をそのまま軽く倒し、アイスは装飾品店を文字どおりに飛び出した。

遠心力と反応+3を入れ替え、喉を浅く斬り裂かれたケロコンを背に白い布へと走り出す。

後ろから追いつがってきた3人の管理隊を確認、足を止めて彼らを迎え撃ち、突き出されたサーベルを余裕をもって回避、全員の腹に加減ぎみの掌底打を入れ、その場で膝を折らせた。

「邪魔しないほうがいいですよー？ 僕は何が何でも見ますからー」

誰に言うともなく、アイスは叫んだ。語尾を伸ばす独特の癖はそのままに。

列を成す県民たちに、ざわめきの波紋が広がっていく。広場の反対側から何人かの管理隊が駆けつけようとしているが、千人単位の人を掻き分けるのは容易くないようで、道を開けると県民に向かってめっぼうに叫ぶ姿が目立つ。

広場の奥、何かを隠すように覆う布には、列の先頭に合わせた位置に切り込みが入れられ、めくればその向こうへ行けるようになっていた。

アイスは躊躇せずに布を掴み、勢いよくその向こうに足を踏み出し、数歩で歩みを止める。

岩のような手がアイスの肩を掴んでいた。振り返ると、火を灯されたかのような赤い目の巨漢が。

どこかで見たなあ、悠長にもそう考えるアイスの顔に巨漢が拳を叩き込んだ。続いて、正面にいる少年の顎に肘打ち。体重を乗せた投げ縄打ちを頬に放つ。

痛みはないが、アイスの体は衝撃を吸収しきれていなかった。2、3歩後ろへよろめき、足で堪える。

アイスは巨漢が自分が付与している剛性の+3と同じ付与値で腕力を付与していると推測。掴みかかる丸太のごとき腕をかい潜り、お返しにと体を投げ出すような肘打ちを鳩尾みぞおちに合わせた。

だが、巨漢に痛感の色はなく、体の軸にもブレは感じられなかった。剛性を+4あたりか、と推測。

間合いを保とうと後ろへステップしたアイスの首を大きな手が掴み、その手の持ち主が声を抑えずに強化名を読み上げた。

「剛性、腕力解除。腕力+7！」

血管が浮き上がるほどに固く握った左拳を脇に溜め、アイスに叩き込まんとする巨漢。

その赤い瞳に赤い筋が入ると気づいたのは、アイスがグラディウスを斜めに薙いでから2秒後だった。

「あ」

単語にもならない一言を発し、アイスの体のどこかを破壊するはずだった握り拳が力なく開かれ、ほとぼし迸る赤い液体を掬うように目を覆う。

「あ、あぁー！」

膝をつき、巨漢が喚いた。アイスはグラディウスに付着した血液を、汚物を見るような目で一瞥。

ぶんぶんと振り飛ばし、鞆に納め、目を押さえながら石畳に這いつくばる巨漢へ言葉を投げかける。

「バランスが重要なんですー。基本は防御。もちろん、今のお兄さんみたいに攻撃へ付与値を集める場合もありますがー、それは確実に仕留められるか、手も足も出ない相手に使う賭けですー」

とはいえ、これはかなり痛そうだ。自分がやったこととは言え、少し哀れに思ったアイスは、自然治癒を持つ

ていないなら、時計塔の近くに住むホソーイ兄妹に習うことですね、とだけ言い、踵を返した。

予想に反して周囲に管理隊の姿はなかった。アイスの目に映るものは左右の端にドアが埋まった幅10メートルほどの四角い倉庫のようなもの。

辺りには同じようなものが15個ほどあり、それぞれが布の向こうの列の先頭に対応するような形で並べられている。

建物の中に入る順番を待つ者だろうか、県民たちはグラディウスを握ったアイスの姿に動揺を見せる。

倉庫らしきものに遮られ、県庁は見えない。んー、見覚えがある、と記憶を辿るうち、アイスはそれが県庁内にあった課の部屋と似た構造だと気づいた。

ということは、背後の布は県庁を覆っていたものか、奇抜な様式はイベントのためだったのか。

そう考えると、イベントへの執念のようなものを感じ、アイスは背筋に寒気を禁じ得なかった。

県民たちが逃げ出す姿を見るアイスの視界に、未だもがき苦しむ巨漢が入る。

(あー、あの時の)

どこかで見たかも、とは感じていたが、アイスはようやく初日の夜にケロコンと共にいた管理隊だと思い出した。

だからといって何をするわけでもなく、正面の長方形の建造物に歩み寄り、左のドアのノブに手をかけて一気に引く。

妙な手応えと壊れたちょうつがい蝶番を見て、内開き型のドアだったと気づき、アイスは苦笑。横たわるドアを跨ぎ、中へ。

外の喚き声に気づいたのか、アイスはサーベルを抜いた2人の管理隊と鉢合わせになった。

「こんにちはー」

苦笑い、薄ら寒い笑みに変わっていた。左の中年男の顎を横に叩いて卒倒させ、一本調子に突き出されてきたサーベルをかわして拳で砕き、目をひん剥いた少年を左の男と同じ方法で床に沈める。

正面にはどうか子供1人が腰掛けられるか、という面積の机。4本の足はパイプに似たもので作られている。机の上には中央に穴が空いた、錆だらけで古めかしい金属の箱が1つ。その後ろはドアがある。

アイスから見て右側には杖を持った1人の老婆が。部屋から出る最中だったのか、ドア以外には何も置かれていないスペースで足を竦めて立ち止まっていた。

「大丈夫ですー。お婆さんには何もしませんー」

どうせ、笑っているか寝ているように見られるのだから、下手に顔を作る必要もない、とアイスは真顔でお婆さんに声をかけた。

流れるような仕草でバックパックと背中に挟まれた鞆から棍を抜き、机の上に置かれた金属の箱を突く。

箱を串刺しにした形で棍を少し手前に引き戻し、宙で停止。体に向けて一気に棍を引き、棍から解放されて落

下を始める箱へグラディウスを振り抜いた。

アイスの予想どおり、古びた箱は鋭利の付与なしで両断できるほどに脆かった。上下に分かれた箱が重力に捕らわれて落下。そのあとを追うようにメモ用紙ほどの大きさの紙がひらひらと宙を舞う。

ほとんどが何も書かれていない白紙に見えるが、アイスの目は白の中に混じる赤を捉えた。赤い何かが描かれた紙が1枚、遊ぶように舞い落ちていく。

ドアから出て行って欲しいと言われた老婆は、歩くために必要だから持ち歩いているはずの杖を使わずに早足で部屋を立ち去って行く。

アイスはその後ろ姿を面白そうに見ながら、白目を剥いて倒れている管理隊をよいしょ、と跨ぎ、床に散らばった紙の中から赤色があった紙を探し始めた。

部屋の外が騒がしくなっていた。のろまな管理隊たちでもこれだけの時間があれば追いつくか。いや、隣の部屋から来てるのかもしれないな。

自分を止め得るような力を持った管理隊はいないと確信しつつも、外に警戒を向けながら紙をかき分けるアイスが、その動きを止めた。

先ほどの紙に書かれていたのは、当たり。その文字を視界に捉えた瞬間、アイスの脳裏に自然保護園で遭遇した中年女性の言葉が蘇る。

『運気が下がっちゃう。当たりを引いちゃったら……さあ?』

(当たりを引いたら、どうなるんだ)

アイスには頭を整理する必要があった。県民たちは15本の列に分かれている。これがムッケとピッコンが言っていたグループ分けだろう。

静寂を保ったまま列に並ぶ県民たちの顔に喜びは見られなかった。

県民たちはこの箱に手を入れて、紙を引く。当たりを引かなかった者は、老婆が出て行ったドアから立ち去る。そうして広場に戻ってきた者のほとんどは嬉しくてたまらなそうだった。

それは、強い安堵から来る感情だろうか。そんな安堵は命の危険を回避もしない限り、なかなか得られないのではないか。

だとしたら、当たりを引いてしまった県民は。

「……ドア、ですねー」

言うと同時に、アイスは小さな机を跳び越えた。着地点で地面に横たわっている白い紙に足をとられ、派手に転んで額を床に打ちつけたが、猛烈に痛い。

誰かに見られているわけでもないのに、アイスは無表情ですくっと立ち上がり、何事もなかったかのようにドアノブを回し、鍵がかけられていることを言い訳に目の前のドアに棍を叩き込む。自分でも完全な八つ当たりだと理解しながら。

ひしゃげて蝶番と合わなくなったドアを手で押しのけ、隙間から体を滑りこませた先には、アイスの推測どおりの光景が広がっていた。

布を剥ぎ取られ、その無骨な体を晒している県庁と思しき建造物。警備の管理隊もいない10メートルほどの距離。

アイスは駆けた。駆けて、すぐに目の前のドアノブを握り、今度はできるだけ静かにドアを開けた。

県庁内部はがらんどうになっていた。アイスの予想どおりに課は姿を消している。イベント終了後に課が収まるべき位置を示すためか、床には何かの染料らしきもので印がつけられていた。

それぞれの課に貼り出されていた県民へのお知らせは、無造作に置かれた数台のキャスターつきボードに集められている。

「……お邪魔しますよー」

周囲を簡単に確認し終えたアイスが、200メートルほど先に置かれた15個のリクライニングチェアに座る6人の背中ごし、数分前にアイスが両断したものと同じ古めかしい金属箱が置かれた黒曜石のバタフライテーブルの前に立つ、三角形の頭をした個性的な白髪の老人に声をかけた。

1人を除く県民たちが一斉にアイスを振り返った。誰もが一様に青ざめた顔で、小刻みに震えている者さえ見受けられる。

だが、その怯えの大部分は自分に向けられたものではない、アイスはそう理解していた。

「おかしいのうー。ケロコンからは県を出たと報告を受けておったんじゃないかな」

しわが

嘎れてはいるが、離れた位置に立つアイスの耳にも届く、じゅうぶんな声量だった。アイスはふん、と鼻を鳴らし、視界の中で1人だけ自分に背を向けている茶洪のスーツを、ケロコンの兄だと断定。

「はいー。間違いなく出ましたよー。でも、ある人から……そうですねー、だいたい4万ゴルの報酬で依頼されたことを思い出したんですー。約束は守らなきゃダメでしょー？」

鞆に棍とグラディウスを納め、アイスは左右の腰に手を当ててゆっくりと歩き出す。ケインの朗らかな笑みに変化はなく、好好爺ぶりは貫徹されていた。

「そうか、そうか。ところで、クリスタルはどうし……おお、服に隠してあるのか」

どうしてクリスタルを気にする、とアイスは疑問を持ったが、まあどうでもいいか、と鎖に指をかけて引っ張り、クリスタルが上衣の下にあると示す。

「で、ケインさんー。その箱には、当たりの紙が入ってますねー？ 1枚ですかー？」

胸まで伸びた白い髭を手串で解かし、ケインは笑みを浮かべたままで一考。一呼吸置いてから応えた。

「おっほっほ、1枚ではないが、ご明察じゃ。さてはケロコンあたりをとっちめて内容を聞いたか」

「いやー、違いますー。あー、とっちめたのは違わないですが、ケロコンさんは吐かなかったですよー」

思わず口をついて出た言葉に驚き、アイスは首を捻りながら歩く。自分にとっては別にどうでもいいことなのにと。

国府を離れてからこっち、どうも自分らしくない行動が多いような気がする。これでいいのだろうか。

(ま一、5万ゴルはもらい過ぎだし……)

過剰な報酬への正当な対価。これが自分を最も簡単に納得させられる理由だった。

「そうか、そうか。それは良好じゃ。——ところで、そろそろ立ち止まらんか？ 県内で人を殺していないという条件つきじゃが、引き返せば罪には問わん」

「ええー、本当はそうしたいところなんです。手紙にも書いてありましたよねー、困っていることがあれば僕に解決を依頼してよいかー。それですよ。僕は4万ゴルで頼まれたんですー」

アイスは歩みを止めなかった。未だ振り向かないケロコンの兄とケインを交互に視野へ納め、席を立ち上がってざわめく県民たちをじろりと見る。

「座れ！」

響いた音は、老人とは思えない声だった。ケインに一喝された県民たちは恐怖に怯えた顔で椅子に腰を下ろし、押し黙る。

今のが本性か、最初から出せば楽だっただろうに、とアイスは内心で蔑み、引きつった笑いを浮かべた。

「クリスタよ、見え透いた嘘をつくでない。儂の県民にはこの儀式を悪く思う者などおらん」

「いやー、儂の。とか言っちゃってる時点でダメですねー。県民は県の私有物だとでも思ってますー？」

「県がある前提での県民じゃろうて。県に養われた身を県のために使うのが県民の義務じゃ。のう？」

ケインに最も近い位置に座る県民が、緩慢に頷く。同時に何か言葉を添えたのかもしれないが、アイスの耳には届かなかった。

「なんていうか、働きアリみたいな言いぐさですねー。というか、声は元気ですけど、もしかして目はもうろくして見えないんですかー？ 目の前にいる人たち、怖がってませんー？」

「ほっ、怖がるじゃと、馬鹿を言うでない。みな、希望どおりに自分が選ばれるかどうか、気を揉んでおるだけじゃ。この県庁で数少ない当たりを引くことは、そういう意味じゃて。何もかもが恵まれとる国府で育ったお主にはわからんよ」

嫌みで言ったつもりだったが、どうも、本当に老眼がひどいのかもしれない、とアイスは思えてきた。

何をどう解釈すれば、あの顔を目の前の喜びを受けられるだろうか、という前向きな不安だと捉えられるのだろうか。

「……引き返してもいいですが、条件がありますー。儀式だかなんだか知りませんが、どうせ結果に人の命がかかってるんでしょー？ 廃止。それを約束してくれたら、このまま帰りますけどねー」

「わからんかのう。命がどうこうではない。お主はユルリに滞在している間、県民たちがよい結果を出すために思い思いのジンクスを実行しているのを見てこなかったのか？」

好好爺ぶりはどこへいったか、元から皺だらけの顔に感情的な皺を増やし、明確な怒りを見せるケインの応えに、アイスは思わず眉と首を捻った。

「……はー？」

「は、ではない。このタイミングじゃ。お主もいちどは見聞きしたじゃろ、みなは当たりを引くためのジnkスを実行しておるし、当然のことじゃと思うておる。これが何よりの証拠じゃ」

アイスは親のいない巢で親を呼び続ける雛のように口を開け、そのまま絶句していた。
この老人、もしかして。ハッと我に返り、恐れるような口調でケインに問う。

「……ジnkスって、どういう意味でしたっけー」

「望む結果を得るために起こす行動じゃろうが。なんじゃ、国府ではこの程度の教育も受けないのか？」

質問するために少しだけ閉じたアイスの口が、餌を啜って舞い降りた母鳥の前で、成長するために兄弟を押しつけて餌をもらわんと主張する雛のように、再び大きく開いた。

呼吸が苦しくなって息を吐くのと同時、その口から短い言葉が飛び出す。

「逆ですよー」

「はあ？」

「逆だと言ったんですー。ジnkスは、自分にとって良くない出来事を指すんです。ケインさんの県民とやらは、当たりを引くことをジnkスと考えて、そのジnkスを払うために行動してるんですけどー……」

「え？」

「えー？」

息の詰まるような、重苦しい沈黙が流れる。ケインが県民たちをぐるりと見回すが、アイスの言葉を進んで否定するものはない。

その様子を見るにつけ、アイスに黒い気持ちが沸々と湧き上がる。この爺さん、まさかそんな……そこまで馬鹿な勘違いを軸にして？

「いや……違う。3人に選ばれることは……」

「違いますよ、何一つ。ジnkスはケインさんの認識とは真逆の意味ですー。ねえ？」

アイスは手前に座る県民の肩を優しく叩いた。ケインもその男を見るが、強ばった顔の県民は肯定も否定もしない。

男から目を離れたケインは視線を宙に彷徨わせていたが、静かに立ち上がったケロコンの兄がその耳に囁いた何かで瞳に光を取り戻した。

「幸せになるんじゃ、幸せに。みな、あの場所で満足げに10ヶ月を過ごしておる。ユルリのために自分の強い運氣と命を捧げるんじゃ、望まぬわけもない」

アイスの鼓動がノッキングしていた。10ヶ月、過ごす、運氣と命を捧げる、耳にしてきた県民たちの言葉——連想できるのは、為政者が定めた愚劣な儀式。

「——本気でそう思ってるんですかー？」

アイスの声が濁っていた。体から血の気が引いていくような感覚、現実ではないものを見ているような。耐冷もなしに薄着、それよりも激しい寒さを感じる。

「無論じゃ。ところで、お主は引き返さなかった。ユルリに足をつけておる限り、県法違反で処罰できる。もちろん、覚悟はできておるな？」

血の気が引いているわけではなかった。頭の上っているだけ。こみ上げる熱量をもった黒い感情が怒りだと自覚し、アイスは無性に可笑しくなった。

「あひゃっ、ひゃっひゃひゃっー！」

甲高く、引きつった笑いが響く。ケロコンの兄も含めて、その場にいる全員が驚いた顔でアイスを視界に収めた。

目じりに涙を溜めたアイスは肺活量の限界まで笑い続け、真っ赤な顔で激しく咳き込み、何度も深呼吸、真顔になり、決然と言う。

「馬鹿の極みですね。ぶっ壊しますー」

ユルリ県 18話

命を大切にしようとか、どんな身分でも命は等しいとか。そんな小綺麗な標語が載せられた看板には跳び蹴りか拳を叩き込みたくなる。

そんな自分が抱く怒りは、決して正義感や義憤からくるものではない。アイスはそう捉えていた。

どこで、どんな方法でかは知らないが、ケインたちは県民の命を糧に県の安定運営を実現している。それ自体は良い。必要なら、そういう手法もあるだろう。ただ、その場合は県民の合意が伴うはず。

このユルリに合意はあるだろうか。そう考えたとき、アイスの答えは1つだった。ない。

数日の滞在ではあったが、今日の日を楽しみにしている者など1人もいなかった。みな、当たりを引くまいと必死にジンクスを打ち払おうとしている。

なのに、主催者は県民の行動の意味を取り違えていた。恐らくは長年の間、大人しく従い続けている県民たちを別に可哀想だとは思わないが、それで命を落とすのはあまりにも馬鹿らしい。

薄々とは感じていたが、自分は権力者が生理的に嫌いなんだ、アイスはそう気づいた。

初対面で国府長を毛嫌いするようになったのも、自分と同じ貧困層の少女たちを食いものにしていた副府長の骨を11本ほど折ってやったのも。

ここで馬鹿なことを県民に強制しているケインも、恐らくは参謀であるケロコンとその兄も同類だ、と。

「国府でのうのうと暮らす者にはわからんち。おんしらが出した自由県立制度のせいで、このユルリは何度も駄目になりかけたち！ そなたびに県民が命を捧げて、県は盛り返してきたち！」

突然、ケロコンの兄が叫んだ。鍛錬を積んでいるようには見えない標準的な体格に禿げ上がった額、どの角度から見ても似合わない銀縁眼鏡。

彫りが深い顔に空いた、小さな穴のような口から出る声は女性のように艶やかで、ゴルの入ったバックパックを大切そうに柔らかく下ろしたアイスの神経を逆なでする。

アイスは鼻で笑った。命を捧げたおかげで県が救われた。その根拠を聞く気にもならない。自分たちのやりたいことに都合が良くなるようにねじ曲げた道理など、聞いたところで耳が腐るだけだ。

「どいてー！」

語尾の緩さは相変わらずだが、アイスにしては鋭い叫びだった。県民たちは余計に身を固くしたが、ケインが鳴らした指笛の直後、石畳の下に身を隠していた管理隊たちが飛び出してきたことでパニックに陥り、アイスの真横を抜け、県庁から逃げ出して行った。

激怒している自分のすぐ横を通るのはどうしてだ、と複雑な表情で県民たちの背中を目で追っていたアイスだったが、気を取り直し、石畳の摩擦音を伴いながら湧き水のように湧いてくる管理隊たちに向け、左手に棍、右手でグラディウスを構える。

「剛性、腕力、反応解除一、剛性+5、強韌性+5一」

霧困気づくりのためか、以前に来たときよりもやけに薄暗い県庁を琥珀色の閃光が照らした。アイスが声を張って読んだ付与値にか、30人ほどにまで膨れ上がった管理隊たちの顔が強張っている。

「五体満足でいたかったら、逃げてくださいー！」

いちおうは警告のつもりだったが、アイスはそれに従う時間を与えなかった。幼少期から強制的に鍛えられた腕力を駆使し、県民が座っていた椅子を3つほど棍ですくい飛ばす。

顔に直撃を受けた2人の管理隊がもんどりうって倒れたことを確認、よし、手間を省けるとばかりに椅子を同じ高さで弾き始めた。

扇状に広がっていた管理隊の陣形が崩れていた。椅子との接触で得た痛みを苦しむ管理隊が6人。仲間意識の賜物か、それとも恐怖に背中を押されての行動かはわからないが、いったんは陣形を乱した残りの24人ほどがアイスを一斉に取り囲み、幾つかの琥珀色の光が瞬いた。

「——その餓鬼、攻撃してもダメち！ 捕ま」

ケロコンの兄の声は管理隊の苦鳴で蓋をされた。サーベルを振り下ろしても、傷ひとつできない。服が斬れるだけ。脚力を付与した足で蹴っても、腕力を付与して殴っても、アイスは意に介さない。

腹部をアイスの棍で突かれ、4人の管理隊が順にくずおれていく。

「駄目だっち！ 手足を捕まえろい！」

奇妙なイントネーションを乗せた美しい声が響く。呼応したのか、椅子の直撃で倒れた男がアイスの足首を掴んだが、すかさずグラディウスで額を斬り裂かれ、血飛沫と共に沈んでいった。

懲りずにアイスを囲んだ5人がアイスに掴みかかるが、1人は投げつけられたグラディウスに太ももを貫かれ、残りは体を軸に8の字を描くように棍を回す、舞花棍まいかこんを受けて弾かれる。

「ひゃっ、ひゃっひゃっー」

アイスは高笑いをしながら跳んだ。管理隊の太ももからグラディウスを抜き、吹き上がる血の筋を一閃。その向こうにいた管理隊の胸部を斬り裂く。

開戦からまだ3分も経っていないが、管理隊は残り半分ほどに数を減らしていた。その顔には明確にそれとわかる恐怖だけが色濃く映り、欠片単位の戦意すら失ったように見える。

棍撃を受けた者、グラディウスで斬られた者。例外なしに苦しんでいるが、彼らには息がある。

アイスは倒れている者を凝視、口を開いた。

「たまたま、まだ生きてますけどー。残りの人たちはどうですかねえー」

アイスはグラディウスから血を振り飛ばす。嫌みたらしく、口を尖らせての言葉だった。威嚇のために刃を向けると同時、正面に立つ、まだ攻撃を加えていないはずの太った管理隊が倒れた。

即座に息絶えた男の後頭部が燃え上がり、嗅いだ記憶のない生物的な匂いがアイスの鼻腔に届く。

ケインが鉄製らしきボウガンを構えていた。弓床の上、布のようなものが巻かれた金属製のやじり 鎌にはオレンジ色の炎が灯されている。

「うわー、最低ー」

アイスは棍とグラディウスを投げて横に転がり、ケインが放つ火矢を皮一枚で回避。味方による後方からの射撃で完全なパニックに陥った管理隊の一部が四方へ逃げ散っていく。

ケインの血走った瞳の先にあるボウガンの先端が、起き上がったアイスへ向けられた。

立ちつくす管理隊の後ろへ転がり込む際、アイスは舌を噛みながら強靱性を解除、耐熱+2を読み上げたところで管理隊の陰に隠れきれなかった両足の脛に3本の矢が接触。

「あつー」

耐熱の付与はどうか間に合ったが、付与値の低さにより、燃えはせずとも熱は伝わっていた。確認する余裕はないが、火傷くらいはしているかも。苦い顔で立ち上がったアイスは背中に気配を感じ、肘での背面打ちを繰り返そうとしたが、間に合わなかった。

ケロコンの兄がアイスを後ろから羽交い締めにし、相手が動けないことに悦を感じたか、高らかに笑う。

「これで、骨を――」

銀縁眼鏡の表面を琥珀色の光が照らし、眼鏡の持ち主が言葉を切る。緩慢な動作で自分の右脛を見下ろし、硬直。脚力+3を付与したアイスが両の足で跳ねると、ケロコンの兄による拘束は容易く解けた。

「いやー、わかってないですねー。僕の上限值は聞きましたよねー。わざわざ低い付与値で耐熱を付与した理由とか、考えなかったんですかー？」

アイスの右足には骨を折ったときの独特な鈍い感触が残っていた。鋭く体を反転させた先には、脛を押さえて倒れ込む男。

「解除のための1秒ですよー。それがあんなしで、今みたいに勝ち負けが決まりますー」

満を持したように登場したわりには、大したことはない。頭も悪い。蔑みを浮かべて冷たく笑い、アイスは立ち上がろうとするケロコンの兄の左腕、次いで右腕を踏みつける。

数十秒前と似た感触が足に伝わり、濁音に変わった美声が悲鳴に変わり、拡散していった。

ユルリ県 19話

「で、終わりにしませんかー？」

アイスは剛性、強靱性、耐熱を+3、腕力を+1に編成。

ボウガンを投げ捨てて駆け寄るケインを警戒しつつ、戦意がないと判断。飄々と提案を投げた。

足に撃ちこまれたボウガンの矢に強化は付与されていなかった。油断するつもりはないが、まず間違いなくケインは強化士じゃない。

アイスは自分の問いに反応せず、ケロコンの兄の脇に座り込むケインを眉根をひそめて注視。

「おおう……ピロコンよお……」

老人の窪んだ瞳から薄い涙が溢れ出す様を見て、アイスの線に似た細い眉がぴくり、と吊り上がる。

ケインはむせび泣きながらピロコンを揺さぶり、アイスがまたしても文化の違いを感じざるを得なかった名前を連呼。

「ピ……というかー、殺してませんよー。痛くて失神してるんでしょー。でも、他にも怪我してる人、たくさんいますよー？」

半ば呆然としている周囲の管理隊を一瞥、アイスとしては鋭く太い棘を含んだつもりの言葉を発した。

そうでない者には情の欠片も見せないが、心を許した者のみに向けられる独裁者の愛情。

有りがちな光景。そういうものが余計にアイスを苛立たせる。

ピロコンに泣きすぎるケインを無理矢理立たせ、アイスはその頬を左右に2回ずつ張った。

ケインは鼻から血を垂らし、両頬には黒い痣が。

「壊すと言いましたー。もういいでしょー」

2つの意味を込めて、アイスは告げた。もう、そっちには抵抗する意味も手段もない。

執着しているこの催しも終わりなんだ、と。

「ううっ……？ うわーっ……」

ピロコンに覆い被さり、子どものように泣き喚き始めた県令。

強い嫌悪感を覚えたアイスは、ケインの頭頂部を拳で軽く小突き、岩のように立ち尽くす管理隊へ、口の端を吊り上げながら命令を出す。

「そこのお兄さんたち、僕の荷物を持ってきてくださいー。あー、バックパックは特に丁重に、極めて優しく扱ってくださいよー」

アイスは軽い火傷を負いはしたものの、歩行に支障はない。

当然ながら本来は不必要だが、自分がこの場を制圧したことを誇示し、最も分かりやすく相手に理解させることを目的としたものだった。

曖昧に指名された2人の管理隊は躊躇うが、アイスが異様に口を尖らせて吹いた、音階の合わない口笛に反応。
混乱を滲ませた顔で、棍とグラディウス、バックパックを両手で柔らかくアイスの足下へ納め、恐る恐る退がっていく。

「よろしいー。あー。行っていいですよ。ケインさん以外ー。あと、怪我してるお兄さんたちは邪魔なので持って行ってくださいねー」

アイスの言葉を境に溜めていた恐怖を放出させるかのごとく、管理隊たちは負傷した仲間を連れて一気に逃げていった。
一般的な主従関係で鑑みれば、命を賭して守る対象であるはずのケインを置き去りにして。

「こんなものですよー。ケインさんなんてー」

部下たちが逃げて行く様を脱力状態で眺めるケインの頭へ、アイスは蔑みの言葉を浴びせた。
見捨てられたことにショックを受けているのだから、自分には人望があるとでも思っていたんだろう。
無性に腹立たしいと思いつつ。

アイスは腰のベルト鞆にグラディウスを、背中 of ベルト鞆に棍を収め、その上からバックパックを背負う、いつものスタイルになった。
踵を返してバタフライテーブルへと歩き、格好つけるように左手で鞆を押さえ、抜いたグラディウスで県民の運命が入った金属箱を両断しかけ、手を止める。

あー、斬らなくてもいいか、とアイスは苦笑いを浮かべた。
拾ってきたケインのボウガンから外した矢を金属箱の穴に落とし、空虚な瞳で自分を見つめるケインに向けてウインク。
自分の背後で上り始めた黒い煙を確認し、自分としては勝ち誇った顔だと考えている表情でケインの傍に行き、満面の笑みで言い放った。

「で、どこでやっているんですー？」

ケインは言い淀んでいたが、アイスの顔が真顔に戻ったタイミングで、一言、時計塔じゃと応えた。
アイスはふん、と鼻を鳴らしてから左手でケインの首の後ろの襟を掴み、やめてくれと懇願するケインを意気揚々と引きずって歩き出し、愉しげに言う。

「良かったじゃないですかー。床とか道とかー、綺麗に整備してるみたいだから、あんまり痛くないですねー？」

アイスは県庁のドアを開けようと手を伸ばしたが、ドアノブが遠のき、手は空を切った。
開いた隙間から差し込む光、眼前に管理隊の姿を認めたが、歩みは止めない。

グラディウスをケインの喉に寄り添わせ、染みのように広がった管理隊を割るように進む。
倉庫のような課を通過、広場との境界線になっている布をめくり、県庁前広場へ。

雨は止み始めていた。

戦闘の興奮が冷え、アイスは寒さを感じ始めたが、ケインのように火矢を用いる者がいる可能性を考えれば、耐冷を付与する余裕はない。

目の前には動揺を抑えられずにどよめく県民たち、背後には管理隊。

「あー、道を開けてもらえますー？」

県民たちは躊躇いを見せたが、管理隊の誰かが開けろと叫んだことをきっかけに両脇へ割れた。

アイスは軽やかなお礼を言い、助けてくれ、痛いと悲鳴をあげるケインを広場の外へ引きずりながら、嘲笑うように言う。

「いやいやー、騒いでも無駄ですってー。ケインさんが人質ですし、戦える人は僕がどんな強化士なのか、もう何となく理解できてるでしょー」

広場を抜けたところで、アイスは喚き続けるケインの体を引き起こした。

2人のあとを追う管理隊と県民たちにざわめき起きたが、アイスは意に介さない。

見たところ、ケインは膝の表面を酷く擦り剥いているようだが、骨が露出しているわけでもない。顔のほうも合わせて、大した怪我ではないだろう。

まー、大きな傷でも止めないけど。とアイスは悦を滲ませた笑みを浮かべ、なお叫び続けるケインを引きずっていく。

時計塔までの道中、アイスの行軍を邪魔する者は現れなかった。

空を覆う鈍色のカーテンには切れ間が見え、少しオレンジがかった光が差し込んでいる。

どのようにして今の状況を聞いたのか、時計塔の前には何十人かの県民が集まり、堂々と姿を現したアイスとケインに短い驚声をあげた。

聞き覚えのある声を見つけ、アイスは無表情に首をぐるりと回す。その先にはホソーイとマルーイ、それにスポーンの姿が。

ユルリ県 20話

「あー、みなさんお揃いでー。マルーイさーん、元気ですかー？」

手で引きずっているものにすぐわない、軽快な口調。ホソーイとマルーイはどう応えるかを迷うように俯いてしまったが、スポーンは努めて冷静だった。

「アイスさま、これは」

「あー、まあ、色々ありましてー。こんな事態になっちゃいましたー。ところで、スポーンさんにお聞きしたいことがあるんですがー？」

アイスのほうは好都合だと捉えていた。ケインたちが主催している儀式とやらがどんな形で県民に伝わっているのかを確認できる。

「はい、なんでしょう」

よく響く、透き通った声。少し巻き癖のある黒い髪と均整のとれた体を折り曲げ、スポーンが応じる。スポーンの態度にアイスは感心させられていた。この状況でよく冷静な対応ができるなあと。

「ありがとうございますー。えっとですねー、僕は内容をケインさんから聞いたんですがー、スポーンさんのイベントについての知識を知りたくてー」

言いながら、アイスはグラディウスの刃をケインの喉に触れさせていた。余計なことは言うな、と。流石のスポーンも、応えれば県法違反にあたるこの質問には困っていたが、ケインを人質にとられている状況と天秤にかけたのだろう、口を開いた。

「10ヶ月にいちど、開かれます。県令も含めて、5歳以上の全県民がクジを引き、最終的に当たりを引いた3人が選ばれます」

へー、県令もねー。アイスは疑わしく思いながらも深く頷き、続けてくださいと促す。

「3人は代表者と呼ばれていて、イベント当日の夜に時計塔の展望室で薬を飲み、亡くなります。彼らの亡骸は次の代表者が来るまでの10ヶ月間、展望室で安置され、その強い運気を捧げることで県を災厄から守っていただきます。務めを終えた代表者の亡骸はすぐに近親者の元へ帰されることとなります」

「へー。展望室に置いておく必要があるとー。じゃあもし、代表者の運気とかいうのが無くなった場合、県はどうなるんですかー？」

「はい。昔、イベントの妨害で展望室から代表者がいなくなったことがありました。たった1時間ほどですが、その直後に県に大きな災害が起きたそうです。ですので、1時間であろうとも絶やすことはできません」

うわわー、これは本物だ。アイスは笑いを堪えながら質問を続ける。

「災害ってー？」

「ええ、数百匹の獣が県を襲ったそうです。それを機に外壁を建造したのですが……」

アイスは鼻で笑う。獣の習性なんて、誰にもわからないだろうにと。

「あーそれよりも、10ヶ月も遺体を放置するんですかー？ そんなことをしたら、腐ってしまいますよねー」

「……いえ。展望室で安置された遺体は特殊な溶液に浸されて腐らないようになっていますので」

本当にこの人はどこまでも冷静だな、と心から感心しながら、アイスは強い疑念を抱いていた。

(10ヶ月も腐らないように、特殊な溶液？ ないない。……この県が排他的なのは、その分野の知識を持った旅人の干渉を避ける目的もあるかなー)

1日や2日ならわかるが、10ヶ月もの間、生物の遺体を防腐することは不可能なはず。専門知識をもたないアイスにもわかる、実現性の低い話だった。

だが、アイスはスポンも含めた県民たちがこのイベントに対して畏怖と同時に敬いのようなものを抱いていると考え、余計な刺激を避けるため、敢えて口には出さないつもりだった。

「そうですかー。ちなみに、代表者さんがわざわざ死ぬのはどうしてですー？ 別に、生きて帰っても問題ないでしょうー？」

「はい。運気はちょっとした行動で増減してしまいますので、多くの県民から選ばれた時点の強い運気を可能な限り保つためと聞いています。それでも、保つのは10ヶ月間ほどだと」

「うわバカくさー」

思わず口を突いて出た言葉に、アイスは慌てて口を横に結んだ。あー、なんか、ついさっき考えていたことと矛盾してるし、こんなことをしても、蓋をできるわけではないけど、と自嘲しながら。

「え……」

「あー、いやー、なんでもないですー。気にしないでくださいー。それと、ありがとうございますー。だいたい、ケインさんから聞いた内容と一致しましたー」

グラディウスの腹でケインの喉仏を軽めに叩き、アイスはケインに行きますよと声をかけ、時計塔に向かって進み始めた。

「あ、あの一。アイスさん？」

その背中を呼び止めるのは、ホソーイのか細い声。時計塔に興味が向いているため、振り向くことを面倒に思

ったアイスは、背中越しにホソーイに応える。

「なんでしょー？」

「あ、あの。どしてこげんこっちゃ……もしかして、おいらたちの」

「いやいやいやー、違いますよー。実はですね、あー……名前を忘れてしまいましたが一、自然保護園で会った管理隊さんたちから、4万ゴルで依頼を受けたんですよー。ユルリをどうにかしてくれって」

管理隊たちを庇ったわけではなく、アイスは自然保護園で会った2人の名前を完全に忘れていた。興味のないものは積極的に忘れていく癖は直らないな、と苦笑いを浮かべる。

「なので、ホソーイさんたちが気にかける必要はありませんよー。みなさんも誤解しないでくださいねー。僕が報酬のためにやってることですからー」

再び、時計塔へと歩き出す。見た限りではドアなどの入口はなく、どうやって入るかはわからない。

アイスが脅しながら訊ねたところ、時計塔には最上階の展望室のみがあり、塔の北側にあるゴンドラで登る形になっているとのこと。

早速、ケインを引きずってゴンドラの前に移動したが、ゴンドラとその源たる発電機の起動ボタンは鍵の掛けられた分厚い金属ケースで覆われている。

壊してボタンを押そうかとも考えたが、強引にやると本体の機能にどんな影響があるかわからないな、とアイスは思い留まった。

ケインの体を起こし、特徴的な三角形の白髪を指で触れる。やはり金属のように固い、予想どおり。いちど触ってみたかっただと思いつつ、アイスが鍵の在処を聞くと、ケインは着ているロープのポケットから金色の鍵を差し出した。

鍵穴へ鍵を差し込み、ケースに守られた2つのボタンを押すと、ゴンドラのモーター音が。

痛がるケインを立たせ、ゴンドラの手すりに設置されている上矢印のボタンを押すと、ゴンドラは軋みながらもゆっくりと登り始めた。

呆然と自分を見上げる県民たちへ鷹揚おうように手を振るアイスは、終着点についたときのゴンドラの大きな揺れにバランスを崩してよろめく。

何事もなかったような澄まし顔でドアの鍵を開け、アイスは自分の鼻をついた異様な匂いに顔を激しく歪める。立ち止まり、臭い。何の匂いだ、と鼻をひくつかせて嗅いでいるうちに、アイスは気づいた。

——糞尿の匂いだと。

アイスはその場に息を止めた。臭い。嗅いだ経験がない強烈な匂いに、^{めまい}眩暈がする。ケインのほうも、形容し難い表情になっていた。だがそこに驚きの色は見られない。

「じっでだんですねー」

まあ、当然か。と思いつつ、アイスはグラディウスを鞘に納め、指で鼻をつまみながら言う。目の前に広がるのは、半径10メートルほどの丸い部屋。3つのベッドと、3本脚のテーブルが1つ。3つの本棚、3つのドア。そのどれもが木製で、相当な年月の使用に耐えているように見える。

展望室と銘うたれているだけに、ドアが3つ並んだ部分以外の壁はガラスで張られていた。アイスは開閉式の窓を3つ見つけ、必死の形相でケインを引きずっていく。

3メートルほどの横幅がある窓を押すが、開かない。取っ手の下に鍵穴を見つけ、開錠。雨上がりの澄んだ空気を思いきり肺に吸い込む。

息を止め、同じように施錠された残り2つの窓を開け、窓際で5分ほど待機。見える景色は、陽光に照らされた谷の傾斜。

県を守る鉄壁とユルリの街並みは目下。

見たところ、20メートルほどの高さがある。これなら、県民が展望室の中を見ることもないのか、とアイスは納得。

ケインは唇を横に結び、生気のない虚ろな目で窓の外を見つめていた。アイスはその様子を指に挟まれた鼻で笑ったが、同時に鼻水が飛んだ。

若干の恥じらいを感じつつ、部屋の悪臭が耐えられる水準に落ちた段階で、アイスは室内に向き直る。

ベッドのシーツの大部分は破れ、赤ちゃけていた。支えているのは、三角に配置された3本の脚。

テーブルの至るところには何かで引っかかれたような痕があり、食べ物と思しきものカスがびっしりと付着。

テーブルだけではなかった。ベッドの脚も、フレームも。指1本でも触れたら崩れるのでは、と思えるほどに日焼けした本を抱く本棚も、3つのドアも。

木で造られた全ての部分に引っかき傷が広がり、そのほとんどに赤黒い染みが寄り添っている。

そして、3つだった。置かれている家具、開けられる窓、ドア。全てのものに3という数字が付き纏う。この展望室で命を捧げる代表者の数も、3人。執念めいたものを感じ、アイスは引きつった笑みを浮かべて言う。

「……ケインさん、明らかにおかしいですねー。代表者さんたちはすぐに殺されるんでしょー？ なら、どうしてこんなに生活の痕跡があるんですかー？」

生活の痕跡、と表現はしてみたものの、それが普通の生活でないことは明白だった。

引っかき傷の大きさ、周辺にある赤黒い染み。誰かが爪で引っかいたのだろう。それも、出血するほどに激しく。

そんなものが部屋の一面に存在する状況、今はましになったが、充満していた糞尿の臭い。

アイスにはケインが嘘をついているとしか思えなかった。

「黙ってないで、応えてくださいー。代表者さんたちはすぐに死んでないですねー？　というか、今日、死んだんじゃないですかー？」

鼻をつまんでいた指を離し、ケインの頭を小突く。ケインは空虚な瞳でアイスを見上げ、しばらく何かを考えていたが、アイスが拳を振り上げたのを見て、小さく頷くだけだった。

「そんなところだと思ってましたよー。死んだ人間の運気を……というか、運気がどんなものかも知りませんがー、とにかく、死んだあとにも残るなんて、ありえないですー。記憶とか書き残したもの以外、死んだ人間のすべては消えてしまいますー」

こう述べたあと、アイスは自分の推測をケインにぶつけた。代表者がすぐに死ぬ、というのは県民を納得させるための嘘で、本当のところ、彼らは次の代表者が来るまでの10ヶ月をこの展望室で過ごす。

すぐに殺さない理由は、ユルリが総意で信じ込んでいる運気を保つため。

その10ヶ月が楽しいものかという、決してそうではない。代表者たちはこの展望室に閉じ込められ、自分たちでは窓を開けることすら叶わない。

ここまでを言い、アイスは展望室を囲むガラスを指で叩いた。

「触った瞬間にわかりましたよー。これ、国府が開発した最新の強靱加工をしてありますよねー。分厚いしー。腕力+6くらいじゃないと割れないかなー。牢獄ですねー」

アイスは続ける。代表者たちはやがて心を病み、少しずつ弱っていく。どんな方法で殺し合いや自殺などを防いでいるかは知らないが、結局、彼らはイベント当日の朝あたりに殺され、体を清められて近親者のもとに返される。

自傷の痕なども隠しているはず。この糞尿の臭いからは想像できないが、監視役が常駐しているんじゃないかと。

食べることを強制し、痩せることすらも防いでいるんだろうと。

「まー、腐ってなくて当然ですねー。だって、少なくとも前日までは生きていたんですからー。それにしても」

アイスは言葉を溜めた。展望室をぐるりと見回し、感情を押し殺したような声でケインに言う。

「よくもここまで酷いことをできますねー」

アイスは確信を持っていた。ケインの反応を見ずに歩き出す。

向かって左のドアを開けると、残りわずかな水と食糧が置かれた倉庫のような空間。

右隣のドアを開けると、酸っぱい匂いが鼻をついた。室内には大きなバスタブ。ピンク色の花卉が浮かんだ黄緑色の液体に沈められた3つの遺体。

少女、老婆、中年男性。アイスに全裸の遺体に触れる勇気は出なかったが、彼らの肌は異常にふやけていた。詳しくはわからないが、この液体が偽装工作に役立っているんだろう、と推測。

次のドアの手前で立ち止まり、アイスは鼻をひくつかせた。ものすごく臭い、ここだ。

この先にあるものを想像し、アイスはドアを開けなかった。

ドアから距離をとり、意識が朦朧としている様子のケインへ口を寄せ、アイスは囁く。

「いいですかー聞こえてますかー。今から下にいる県民たちに全てを話しますー。僕の質問に嘘をつけば、その場でぶっ殺しますよー。こんな顔なのでわかりづらいと思いますがー、実は僕、今、すんごく頭にきていますのでー」

ユルリ県 22話

「まっ、」

「……ま、なんですかー？ ぶっ殺す、じゃ理解できませんかー？ いいですか、手足の1本ずつを串刺しにして……まーとにかく、そういうことですかー」

ケインは何かを言いかけたのを察し、アイスはそれを阻止した。もう今さら乞われてもね。まあ、見逃すつもりなんて最初からないけど、とほくそ笑む。

窓際に立ち、県民たちを見下ろし、アイスは弱っている爺さんの声でも届く高さであることを再確認。自分は大声を出すのが面倒くさいからと、強靱性と耐熱を解除、発声+3と聴力+3を付与、思いきり息を吸い込んだ。

「あー、お集まりのみなさん、ご静粛をお願いしますー」

アイスはここで言葉を切り、県民たちの注目を集める。よし、ショーの始まりーと自分だけに呟いたが、発声の影響で声が響き、あれーと驚いたが、その声も同様だった。

「えー、おほん。あー、あー、良好。みなさん、聞こえてますねー？ 今のはテストですからー。ここからが本題です。まだ自己紹介をしていない人がほとんどなので、まずは僕について話しますー。僕は、アイスですー」

県民たちのざわめきの中に^{アイス}氷という単語を聞き取り、アイスの耳がピクリと動いた。

「こらそー。違いますよー。アイスは僕の名前ですー名前ーな、ま、えー」

^{アイス}氷と言った声が消えたことを確認、鼻を鳴らし、気を取り直したアイスが話を再開。

「今日のイベントについてのお話をしますー。まずは見てもらうことが一番わかりやすいと思うのでー、今からゴンドラを降ろしますねー？ みなさんのうち、どなたでも構わないので、ここに登ってきてくださいー。あー管理隊の人はダメですよー、来たらこの薄汚い爺さんをぶっ殺しますからー」

ここまでを言い、アイスは少し思案。念のために補足を入れることにした。

「あー、登ってきた人は大丈夫ですー。僕が怒ってるのは、このドグサレ爺さんと管理隊ですのー」

遙か足下でざわめきが広がっていく。集まった数は軽く100人を超えているし、立証人としてはじゅうぶんかな、とアイスは満足を覚える。

「すみませんがー、早めをお願いしますー。ここ、わりと寒いのでー」

そう言い、まだ悲鳴をあげる元気を残したケインをサイズの合わないズボンの裾のように引きずり、アイスは展望室の入口へ。

ゴンドラに乗り、下降ボタンを押す。急いで展望室に戻り、降りていくゴンドラを見届けたあと、発声を解除。アイスはため息と共に空を見上げていた。

報酬をもらい過ぎたからといって、こんな、明らかにお節介なことをしている自分が信じられない。もしかして、陽光を浴びているこのクリスタルには持ち主の性格を世話焼きに変える力があるんじゃないか、アイスはそう疑い始めていた。

「……んー？」

喉の下、鎖骨の間。慣れてきたクリスタルの感触。その鉄紺色を凝視し、アイスはゆっくりと首を捻る。クリスタルが陽光を全身に浴びていた。色が色なので輝きはしないが、少し艶が出ている。

「あー！」

叫び、アイスは顔を引きつらせていた。こいつ、いつから出ていたんだろうか。今、無意識に？ いや、やっていない。だとしたら、いつから――

「あ、アイスさま？」

聞き慣れた声に顔を上げると、そこにはスポンとホソーイ、それにマルーイの姿が。アイスは3人を一瞥し、クリスタルに目を落とし、疾風のごとき速度で3人を二度見。顎が外れるのでは、と心配になるほどに開いた口、細い目の稼働領域いっぱい目を見開き、珍しくその鉄紺色の瞳を見せたアイスの形相に驚いたか、普段は冷静なスポンが焦っているようだった。

「……」

アイスは表情を崩さずに3人を見つめていたが、我に返り、あーおほん、と咳払いをして平静を装う。

「ど、どうしてスポンさんたちが来るんですかー。せっかく、僕とはあまり接点がなかったように見せかけたのにー」

自分が本音を言っていることに気づき、これはいよいよおかしいぞと、アイスは知らぬ間に外の風を浴びているクリスタルへの疑いを強くしていた。

とはいえ、言ってしまったことは今さら取り消せないだろうと開き直る。

「3人が怪しいじゃないですかー。僕に話しかけてましたしー。これから、この県がどうなるか、わからないですよー？」

そうは言ったものの、慣れた3人が来てくれたことは、自分のことだけを考えた場合、決して悪い状況ではなかった。

それと、強化士が2人いるのは頼りになる。

「まーいいですー。じゃあ、中に入ってくださいー。ちょっと臭いので、覚悟してくださいねー」

何故か嬉しそうな顔のホソーイを一瞥、アイスは踵を返し、3人を展望室へと誘う。

歩く最中、3人は引きずられるケインを気遣う仕草を見せていたが、アイスはこう思っていた。それも長くは続かないだろうと。

3人をドアの前まで誘導、アイスは自分なりに重苦しいと思う口調で事実を告げた。

「たぶん、驚くと思いますのでー。先に言っておきますねー。まず、このドアの先には3つの遺体がありますー。彼らをゴンドラで降ろしてあげてほしいのが1つですー。その前に、右のドアも開けてくださいー」

何も言わないが、3人は既に顔をしかめていた。空気を入れ換えて薄まったとはいえ、発生源であるはずのドア近くでは糞尿の臭いがきつい。

もう、状況が異常であることには気づいているだろう。アイスはそう思っていた。

明らかな怯えを見せる男2人に代わり、マルーイが勢いよくドアを開ける。

ドアの脇に立つアイスにも届く花の香り、ホソーイの小さな悲鳴。

「前回の代表者の方々ですねー。苦しそうですし、ふやけてるでしょー？ それは、近親者に返すまでに表情とかなんとかを整えるためだと思いますよー？ 空気に触れると固まる、とかそんなんじゃないかとー」

どんな液体かを知らないのに、あくまで推測ですが。アイスはそう補足し、もはや顔を上げてすらいないケインの後頭部を冷えた眼差しで見つめる。

ホソーイは顔を手で覆い、スポンとマルーイは口を真一文字に結んでいた。

自分が何を見せようとしているのかは、何となくもう伝わっているだろう、と思いながら、アイスは右のドアを開けるように促し、自分は後ろに跳び跳ねた。

鼻をつまんだマルーイがドアを開ける。そこに在ったのは、国府で標準的に使われているトイレとはかけ離れたもの。

ただ穴が開いただけの便器らしきものに、飛び散った汚物。それは穴からも溢れ出ている。

マルーイが即座にドアを閉め、吐くのを堪えるように屈み込み、ホソーイとスポンは青ざめた顔でケインを見つめている。

「わかりましたかー？ 代表者さんたちはすぐに死んでなんかいませんー。10ヶ月間、ここでたっぴりと苦しんでから、昨日、今日に殺されたんですー。これまでの代表者さんたちも同じですねー」

少し酷かな。とは思いながらも、アイスは兄妹を指名し、遺体を降ろしてあげてほしいと頼んだ。

迷っていたが、2人は同意。展望室に琥珀色の閃光を輝かせ、バスタブから3人の遺体を運び出す。

「こんな……ひどい……」

アイスの予想とは違い、空気との接触で固まるわけではないのだろうか、遺体に変化は見られない。

腐っているかのような遺体の感触に驚いたのだろう、ホソーイが発した呟きをアイスは聞き逃していなかった。

ユルリ県 23話

「ひどいですねー。ちなみに、すぐ殺さないのは、出来るだけ運気を長く保つためだそうですよー。この爺さんが認めてましたー」

3人が啞然とした顔でケインを見る。

つい1時間ほど前までは県民を一喝し、従わせる権力を誇示していたケインだったが、今は生きる気力を失ったようにうなだれ、展望室の窓際へ移動するアイスに抵抗の欠片も見せなかった。

発声+3を付与。大きく息を吸いこみ、アイスは遙か下の県民に向けて声を張り上げる。

「ゴンドラには代表者の方々の遺体に乗ってますー。その顔を見てくださいー。すごく苦しそうですよー。それと、登ってきてくれた3人がすごいものを見ていますからー。詳しくは彼らでー」

ここまでを言い、アイスはケインの身を下に落ちる寸前まで押し出した。

県民たちから大きな悲鳴が上がるが、アイスは気にも留めていない。

「さてー、じゃあ答えてもらいましょうかー。ケインさんはこのイベントにちゃんと参加してるんですよー？ どうなんですかー？ 嘘をついたら……わかりますよねー」

明確に聞いてはいなかったが、これだけ卑劣なことを実行し続ける人間が公平を志すわけもない。

権力者とはそういう人種なんだ。県が違ってても。

国府で行われてきた数々の横暴を見ながら生きてきたアイスは、そう確信していた。

「許して……」

「はいー？ 聞こえないですよー」

「許して、くれ……」

こいつ、最後の抵抗すらも脆いのか。

アイスは鼻を鳴らし、ケインに侮蔑の目を向ける。

「僕にだけ、ですかー？」

「……許してくれえ……県を守るためだったんじゃあ……」

あーこれは肯定だな、と判断。掴んでいた窓枠から手を離し、落ちないようにバランスを保ちつつ、アイスはグラディウスをケインの後頭部へ伸ばす。

質問の答えを、下にまで聞こえるように大きな声で言えと命令。

「——ワシはクジを引いておらん！ 許してくれ、すべて、このユルリ県を守るためだったんじゃ……」

後半は声が消えかけていたが、前半はじゅうぶんな大きさだったな。

眼下で広がる、雷のようなざわめき。

アイスは満足を覚え、押し出していたケインを敢えて強く引き戻す。

ケインは苦痛に悶えていたが、アイスに自分の目を覗きこまれ、息をのむ。

「これで終わりですよー。少なくともケインさんは。まー、悪趣味眼鏡の2人もですかねー」

涙を漏らす老人の瞳を、鼻が触れるような距離から凝視。アイスの顔には満面の笑みが浮かんでいた。

考えてみれば、発声を付与したままで明確に言えばいいだけのことだったと。

「1つだけ謝りますー。僕は誰からも依頼されてません、あれはウソでしたー。当然、ここに来た3人も無関係です。ただ、泊めてもらっただけですしー」

「な……」

「なんで、ですかー？ それは僕にもわかんないですー。でもたぶん、ケインさんの人をバカにしたような髪型が気に入らなかつたんでしょー」

そう言い、アイスは県民に向けてゴンドラを上げるように要求。

心なしか先ほどまでよりも軽くなったように感じるケインを入口まで引きずり、登ってきたゴンドラが無人であることを確認。

「じゃあ、頑張ってくださいねー」

ケインをゴンドラへ放り投げ、下降ボタンを押す。ゴンドラが下まで降りたことを確認、アイスは剛性と腕力を解除、グラディウスに鋭利+4を付与。

グラディウスでゴンドラの昇降ギアを切断、まだゴンドラの上にいるケインに大きな衝撃が加わったことに少し悦を感じつつ、再び県民の前へ。

「確か、運気を絶やしたらまずいのは1時間でしたよねー？ ついでなので、それもウソだと僕が証明しますー。ちなみにも僕は、こんな旅をさせられるような、不運人間ですからー、僕だけが朝までいて何も起きなかったら、そういうことですよねー？」

先に降ろされた代表者の遺体とケインに、多くの県民が群がっていた。アイスの耳には彼らの混乱が音となって伝わるが、自分の言葉に対する反応はわずか。

まあいいか、どうせ明日の朝には全てを理解することになるだろうし。

アイスは鼻を鳴らし、口を開いた。

「ちなみに、ゴンドラは壊したのでー、みなさんは登ってこれませんー。まー、それなりの強化士がいた場合、話は別ですがー、ただ、それなりなら僕に突き落とされるだけですのでー」

朗らかな笑みを浮かべ、アイスは眼下の県民たちに向けて手を振った。

踵を返し、編成を剛性、強靱性、耐冷をそれぞれ+3で付与。

体温を取り戻していく感覚に気持ちを和ませながら、冷静になっていく頭で深い後悔を覚える。

薄くなったとはいえ、糞尿の匂いは残っている。ベッドも汚らしく、とても横になれたものじゃない。かと言って、ソファがあるわけでもない。

少量の水と食糧が倉庫に残っていたが、この空気に長く晒されていたものを食べる気にはなれない。それだ、バックパックの中にこの空気を入れたくもない。

いったい、自分は何をしているんだ。

今やっていることで、何の利益があるんだろう。

「んあー！」

考えるのが面倒くさくなり、アイスは反対側の窓へと走り、膝を抱えて座り込んだ。

このほうが空気はマシだ。もしトイレがしたくなったら、この窓から放出してやろう。

それぐらいのことはしてもいいはず、自分はこの県を正しい形に直そうとしているんだから。

そう考えたアイスの頭を、ふと疑問が過ぎる。

正しい。正しいって、誰にとって正しいのか。

このあと、信じていた県民たちはどうなるだろう。

ある意味ではジnkスとも言えるこのイベントの真実を知っても尚、大切に思う人がいないと言いきれるだろうか。

自分がやったことは、強い力を持つ者の……？

「……エゴ？」

語尾すらも伸ばさず、アイスはぽつりと呟く。

その言葉の余韻がどうしようもなく不快で重たく、アイスは俯き、目を瞑らざるを得なかった。

刹那、クリスタルが輝いたことにも、気づかず。

ユルリ県 24話

それからの時間を、アイスは悶々と過ごしていた。なるべく匂いのことは考えず、区切りとなっていた1時間などはとうに過ぎている現状を見て、街で起きているはずの騒ぎにも目と耳を傾けず。

朱を塗ったかのような夕焼けの中も、空に散りばめられた星々が自分の存在を光で主張する時間帯も。頭を過ぎるのは、エゴという言葉と、喉の乾きや空腹。たまに臭い。

迷いや自問自答は次第に苛立ちへと変わっていき、星の光の中、アイスは厳めしい顔で唇を噛んでいた。クリスタルの鎖を指に絡めては放し、飼い犬の首輪のようにつけられたクリスタルを疎ましく思う。

こいつが、元凶なんじゃないのか。でなければ、ここ2日ほど、特に今日の自分を説明できない。

——でも、本当にそうなんだろうか。

違和感は、もっと前からあったのかも。

アイスは考える。

神のようにふるまう母親と、何も言わない凡人の父親、戦闘訓練の名を借りた実戦に明け暮れる毎日。貧困に喘ぎ、学舎に通えたのは国府の援助があった2年間のみ。

1年にいちど学舎に忍び込んで、年度で替わる教科本を盗み、睡眠時間を削って独学を積んできた。母親から命じられたわけではない。そうしないと、という一種の脅迫観念にも似たものだった。

友達もできず、心を許せるものは皆無だった。

生きていて楽しいと思えたことは、自宅近くの野良猫たちとの交流のみ。

あいつらだけは、自分を色眼鏡で見なかった。綺麗な水晶体のままで接してくれた。

国府の人間は自分の存在を知っていた。まだ16歳で1段、このステータスに怖れていたかもしれない。同じ強化士からは、天才だ、努力もせずに。と陰口を叩かれてきた。

そのたびに、アイスは思ってきた。天才じゃない、自分は無理矢理にそう作り上げられたんだと。

無償では誰からも頼まれず、自分から誰かに何かを頼むこともしなかった。

他人がどうなろうと微塵ほどの興味もないし、助けるなど^{もっ}ての外。

少なくとも、訓練で自分に惨敗した日の夜、珍しく酔い潰れた母親と自らを父親が刺し殺すまでは。

息子を痛めつける母親、それを止める力のない自分、強くねじ曲がっていく息子、それを正せない自分。これ以上、見ていられない。せめてもの償いをする。無責任だけど、正しく生きてほしい。

思い返せば、事件の翌日に父親の遺書を読んだときからかもしれない。

情けない形とはいえ、父親が自分を思っていたと知ってから、説明のつかない行動をとるようになってしまったのかもしれない。

副府長の件も然り。その他にも、幾つか。

結果、刑鑑所に放り込まれるあたりが、いかにも自分らしいけど。

「……ふー」

考えるのも疲れた。臭い。考えてもわからないし。

尿意を感じ、置かれた武器の脇でアイスはのっそりと立ち上がった。

下に向けて放尿の態勢に入るが、思い留まる。

尿意の限界まで悩み、深く息を吸い込んだ。

毒殺された者のような表情でトイレのドアを開け、余計なものは見まいと目を瞑り、放尿を終了。

猛然と窓際まで駆け、四肢を限界まで広げて夜風を堪能。

疲弊しきった顔で膝を抱えて座る。

「……あー」

お腹が空いている。臭い。床が硬い。喉が渴いた。不平不満を言えば限りもない。

アイスは深く長いため息のあと、投げたような口調で独りごちた。

「何やってるんだろー……」

夜は長い。アイスに出来ることは2つ。

落ちないように窓際から移動すること。朝を待ちながら、夜が過ぎるのを待つことだけだった。

*

翌朝、アイスは間近で蠢く何かの気配で目を覚ました。
反射的に横へ転がり、顔を上げた視界の端。大きな鴉が窓の外へ羽ばたいていく。

鴉を目で追った先には柔らかな陽光。アイスは元から細い目をさらに細め、陽の輝きを見つめる。
天気がいいな。臭い。

急激に覚醒した意識に驚き、アイスは勢いよく立ち上がった。反対側の窓際へと歩き、下を覗き込む。
比ではなかった。昨日より何倍も多い県民が集まり、一斉にアイスを見上げる。

彼らが何かを叫んでいると気づいていたが、アイスにはそれを聞き取る意志がない。
もう逃げよう。この県に関わりすぎた。あとは県民たちが全てを決めるだろうし、そうするべきだ。

アイスは全ての強化を解除し、強靱性を+10で付与。グラディウスをベルト鞆に納め、バックパックと棍を腕で抱え込んだ。

反対側の窓際まで歩く。地上の様子は確認せず、躊躇いなく20メートルの高さから飛び降りる。

「うわあぁー！」

アイスが石畳を踏み碎いて着地するや否や、辺りに男性の悲鳴が響いた。
驚いたアイスが振り返ると、数メートル先に立つホソーイとマルーイの姿が。
2人は、腰を抜かしたように中腰になっている。

「あれ一何してるんですかー」

バックパックと棍を定位置に戻しながら、アイスは不思議そうに首を傾げていた。
予想外だった。わざわざ裏から降りたのに、この2人と会うことになるとは。

「びっ、びっくりしたべえー」

ホソーイの足は、産まれたての子鹿のように震えていた。マルーイは目を見開き、アイスが飛び降りてきた時計塔とアイスを交互に見比べている。

「強靱性を+10で付与しましたー。まーたぶん、+7くらいでも大丈夫ですけどー、念のためー」

言った直後、アイスは剛性、強靱性、耐冷をそれぞれ+3で編成。
2人に向かって顎をくいと上げ、応えを促す。

「あ……アイスさんなら、ごうするがと思って」

聞いた瞬間、アイスの身に衝撃が走った。

まさか、簡単に行動パターンを読まれるほどに深く関わってしまったのかと。
自分のほうはそのつもりがなかったのに。

そうだと知れば、この場を早急に立ち去らなければいけないのは尚のこと。

「あ……あー。そうでしたかー。では、僕は次の県に向かわなきゃなのでー、失礼しますー」

久方ぶりにマルーイが声をかけ、慌てた様子で歩き出したアイス呼び止める。

「待てよ。オマエ、あれからどうなったか、聞かねえのかよ！」

アイスの耳がびくりと動いた。足を止め、2人に背中を向けたままで沈黙。

「管理隊の隊長と副隊長は部下に助けられて逃げ出しやがったけどよ、県令は殺されたよ。殺ったのはオマエが降ろした前の代表者の親兄弟だ。時計塔の反対側に、^{はりつけ}磔で晒されてやがる」

あー、さっきの鴉はその影響か。

アイスは得心し、ケインが死んだことに何も感じない自分を確認、強い安堵を覚えていた。

「そうですかー。じゃあ、逃げた管理隊に旅先で会ったら、必ず殺しておきますねー」

気分を良くしたアイスは、振り返り、普段は滅多に見ることのできない朗らかな笑みを2人へ。
ふと、スポーン姿がないことに気づく。

「あれー、スポーンさんはー？」

問われた2人が、互いの顔を見合わせた。

その顔から複雑極まりない感情を感じとり、アイスは何かまずいことを聞いたかな、と首を傾げる。

「……あの野郎、出て行ったよ。しかも、屋敷のゴルを大量に持ち出して」

アイスは聴力を付与していない自分の耳を疑った。あのスポーンさんが、なんだって？

「へー？」

「だから、夜の中に逃げたんだよ。これまで尽くしてきたのは、ジンクスを遠ざけるためだったっていうメモを残してな」

「ん、へー？」

——悲鳴にも似た、アイスの驚きが響いた。

数十分後、アイスは鉄壁の穴から県の外へ。

ここに来るまでに会った県民たちの、自分に対する称賛の声がやけに耳に残っている。

ただ、困ったことに不快ではない。

そのことに無性な不安を覚えつつも、アイスは何かを噛みしめるように、ゆっくりと歩き始めた。

次の目的地である、高さ2500メートルの一枚岩の上に居を構えた、レソト県に向けて。

2章につきまして

ここまでお読みいただき、本当にありがとうございました。
続きにつきましては、有名な小説家になろう様で書かせていただいております。
完全無料で登録なしで読んでいただけます。
今のところ、こちらで続きを書くとしたら、
小説家になろう様よりもかなり後での掲載になるかと思えます。

大変に申し訳ありませんが、まだご興味をお持ちであれば、
小説家になろう様でお読みいただければと思います。

[第2章（間章）はこちらです。](#)

どうぞ、宜しく願い申し上げます。